
チートな異世界戦記

sasurai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートな異世界戦記

【Nコード】

N8071L

【作者名】

sasurai

【あらすじ】

目が覚めるとすでに死んでいた。神様のみかかる病気に不幸にもかかってしまった、本条竜也。彼の第二の人生はなんと異世界！？お気楽な天気な主人公が送る最強チート物語。*チートが嫌いな人は覗かない方がいいです。

第零話 エピローグとプロローグは似ている

俺、本条竜也。高校二年生、勉強は普通、運動神経は滅茶苦茶良い。実家は古くから伝わる古武術の道場。

え？どんな武術かだって？

分かりやすいようにいうと。ゲームに出てくる龍の刺青を彫った人の戦闘スタイルです。

なんだよ？その疑いの目は！

確かに他の人から聞いたら冗談のように聞こえるかも知れないけどでもホント。

路上にあるのは何でも使う、敵がダウンしたら踏みつける。壁に叩きつけるジャイアントスイング、ドロップキックなど何でもありの武術だ。

古武術だからプロレス技等は使わないって？そうでもない。

俺の習っているのは特殊で時代の流れに逆らわず常に新しいものを取り入れ吸収し最適な技にアレンジするというものだ。

何もついいいだと？

まあいいや、そういう特殊な古武術を習っていたがその他はいたって普通だ。

ちなみに、俺はゲーム・漫画・小説・アニメが大好きである。だが、中二病ではないぞ。

さて何でこんなことを言ってるかと言っと。

「い、以上です。あ、合っていますか？」

金髪の少年が俺に質問していたからである。

「ああ。合ってる。」

よかったーなどと涙目になりながらほっとしていた。
俺は質問されてからずっと答えまくりだ。

「い、以上で終了です。何か聞きたいことはあ、ありませんか。」
やっとか。

「んじゃー色々と聞くね。」

なんかおびえているみたいだから要点だけで済ませよう。

「まず1つ。ここどこ。」

周りは真っ暗な空間である。宇宙空間に放り出されたように何も無い。

「はは、はい。ここどこ、ここは隔離世界です。いわゆる三途の川だと思ってください。ごめんなさい！」

なぜ君が謝る。しかし三途の川ねー。ということは。

「俺死んだの？」

「はい。そうなんです！ごめんなさい！すいません許してください！」

そう言っって高速で何度も頭を下げる金髪君。だからなぜ謝る？

「そうだったんだ。死因は？」

なんせ昨日普通に眠って起きたらこれだ。

「は、はい、えーっと。」
ぺらぺらと懐から出した手帳をめくって探している。

「死因、死因。あ、あった。えっと仙病です。」
全く分かん。何だそれは？

「仙病とはですね。主に神様がかかる病気で風邪のようなものです。」
神様も風邪ひくのか。あれ、俺人間なんですけど。

「そそそそれが。特殊だったらしく人間にもかかるようにな、なっ
てしまってそれで。おまけに人間にとってはとてつもない病気でペ
ストと天然痘とインフルエンザをミックスさせたようなものでして
はい」
それってまずくないか？それじゃあ人類全滅じゃん。

「あ、ただ大丈夫です。変異していたので感染力は0%に等しいで
す。」
そんな絶望的感染力の無さの病気にかかったのか。運が悪すぎる。

「そっか。それじゃー、二つ目。きみは誰？」

「ははははははい、私は死神です。すみませんすみませんすいま
せんすいません。」
だから何故にそんなビビっとるん。別に怒って無いヨ？

「まいつか。それじゃ三つめ。俺はこれから地獄に行くのそれとも
天国？」
死んだのならこれがベターだろう。天国がいいなー。

「そ、それについてなんですが。」
彼は気丈にも言おうとしているようだ。だが声が震えてる。俺ってそんな怖く見える？

「じ、実はあなたは九十歳まで生きるはずだったんです。」
はず。ということは、俺は神様の予想外の死をしてしまったらしい。

「ほ、本来なら生き返らせるのが妥当なのですがもうこの世界でのあなたの肉体は灰になって不可能なんです。」
そうなん？じゃあどうすんの？

「新しい人生を歩むということもできるですが、そ、それだと記憶の方も受け継がれるので、難しいです。そこで神々があなたを異世界に飛ばして第二の人生を送っていただきます。」
ふーん。異世界か。どんな世界？

「は、はい！基本的に時代背景は中世のヨーロッパ。剣と魔法があり魔物もいます。」
肉体のほうは再構成できるのでご心配無さらずに。」
まんまRPGゲームの世界みたいだ。しかしそーなると問題は。

「それじゃー異世界に行くのはいいととして、その世界は物騒なんだから？何かしらの能力が無いと危険じゃないか？」

「そ、そうです。だから何か要望があるなら仰ってください。出来るだけ望みはかなえるようにしろと指示が出ているので。」
随分と太っ腹だな。まあいいか。さてどんなものにしよう。

はっきり言って、俺の思いついたものはどれもチートばかり。でもまー無茶なことを頼んでも大丈夫みただし言ってみるか。

「いくつがあるけど。」

そう言っただけは次のことを死神君に案をだした。

- 一つ、その世界での言語を日本語に変換する能力を身につけること。これは必須事項。
- 二つ、魔力や神力を無限に。あと魔法の才能を天才級に。
- 三つ、あと出来るだけ俺が覚えていた技や知識を受け継ぐこと。
- 四つ、俺が記憶できる容量をほぼ無制限にしてください。
- 五つ、空想具現化能力をください。

「こんなところかな。」

ひととおり案は出しておいた。チートすぎて自分でも笑えないがこつちも第二にの人生でいきなり魔物や盗賊とかに出会って死ぬのはさすがにごめんだ。

「あ、あの〜?」

うん? やっぱり全部は無理だったか?

「いいいいいいえ、そういうことではなくてですね。この最後の空想具現化とは?」

そのことが。

「簡単にいうと。俺の思った通りにすることが出来る能力です。」
自分で言っただけで恥ずかしいがこれがかねえば事実上神に匹敵する力である。

「なるほど。あつ。ちょっと待っててください。」

そういうとあさっての方向に向いて何やら知らない言語ではなしている。交信しているのかな?

「じゅ、受諾されました。あなたが言った能力は全て付随されます。

」
「おおー！そうか、最悪一つ目だけと考えていたが。よかった。

「そ、それではこちらになります！それと、あちらの世界についてから能力が使えますので。が、がんばってください！」
ブンブンと音が聞こえそうな位腕振ってるよ。とにかく行くか。

俺は真っ黒いブラックホールみたいのに飛び込んだ

第零話 エピローグとプロローグは似ている(後書き)

プロローグです、誤字・脱字を発見したらコメントを下さい。

第一話 ご利用は計画的に

目が覚めたら異世界でした。

いや、俺の場合目を開けたらか？

まあ、どうでもいい。

さあーやってきましたよ異世界に！

只今なーんにもない草原にいます。

息を一杯に吸い込むと草の香りと新鮮な空気、暖かな太陽の光。

ここで野生の魔物でも出ないなら即効で昼寝をしていたに違いない。

しかし竜也の後ろには三十m後ろに森がある。

いかにもモンスターが出てきそうな森なので昼寝はやめておいた。

「さて、きたはいいけどこれからどうしよう？」

とりあえず、今必要なことをまとめてみる。まずは町に行くことかな？そこで色々と情報を集めよう。

次に、武器が必要だな。

でもお金ないから町に行っても買えないし。

ま、空想具現化の能力で作れば問題ないか。

最後は町の方向が分からないな！。

と言ってもすぐそこに道（道路などではなく）があるから最悪その道をたどればいいか。

よし、とりあえず今やることは武器の製造だ。

「しかし、自分でいった割にどうすればいいんだろっ？」

まあーこういう場合は何か自分の知っている武器を出すのが一番だ。というわけで何がいいかなー。

剣とか刀かな？でもあんまりそういうものには触れる機会あんま無かったなー。

ナツクル系や棒系にしようかなー？

ナツクル系だと近接接近だから対人間用にしか使えないし、棒系だと効果が薄いし。どうしようか。

・・・。

・・・そうだあれがいいかな？

早速思いついたものを頭に思い描いて・・・。

ここから先どうしよう。

適当でいいか。

「空想物固定。用途は武器。種類は銃。系統はアサルトライフル。性能を完璧に再現。名前はAS 100F。空想具現化！」

空中に手をかざして適当な呪文でやってみる。すると。

ピカーっと光る。

光がおさまるとそこには本物の

「はっははは。本当に出来ちゃった。」

そこには映画などでみる兵隊が持っている小銃。俗にいうアサルトライフルがあった。

しかもこのライフルは現実にあるものではなく、前にゲームでやった地球を守るE Fの陸 兵さんが持っている最強のアサルトライフルだ。

ちなみに性能は

名前：A S 1 0 0 F

攻撃力：2 1 0

弾数：2 0 0 (発)

連射速度：1 5 (発 / s e c)

リロード時間：2 (秒)

射程：1 9 2 (m)

命中率：A +

ズーム：なし

重さ：7 K g

反動：3 0

というとんでもないものだ。

しかし、攻撃力においてはいまいち凄さが分からない。
なので実射してみよう。

「森の木を撃つてみるか・・・ってこの銃重いな!!」

いかんせん鍛えているとはいえ、本物銃。それも軍用のものは触ったこともない人にとってはなかなか重い。

このままでは持ち運びどころか撃てるかどうかもわからないのでステータスをいじることにした。

「対象物のステータスの参照。目的は改造。」

ブン。

目の前にコンピュータのウィンドウのようなもの開く。

こんな風になつていいのか。
ふんぶん、やはり重さの値が高いな。なら値を低くして、ついでに反動の値も低くしておくか。
ウィンドウの値はゾンビを倒す某ゲームの四作目の銃のステータスのようなものだ。
違うところといえば項目がかなり多いということ位だ。
重さと反動の値を最低ラインにし終わるとウィンドウを閉じる。

「うん。軽い。」

持ってみるとさっきまでの重さが嘘のように軽い。というよりモデルガンよりも軽い。

「さて、それじゃー気を取り直して。」

銃を木に向ける。ゲームの仕様なのか十字のカーソルが表示される。これならあてるのは簡単そうだ。
そして引き金を引く。

バンツ！

バシツ！

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

・・・。

えーっと今起きたことを簡単に説明すると。
弾が当たった場所、これが枝をへし折ったような跡になって重さによつて倒れた。

理解できた？

ちなみに後ろにあつた木は無傷だ。

とんでもない威力だが貫通性が無いのはゲームの影響だろうか？

そこらへんのところはこれからゆっくりと調べていこう。

ちなみに、乾いた音が発したが反動はほとんど感じ無かった。

とりあえず威力は申し分ない。

後の問題になりそうなのは命中精度ぐらいだがさつき出たカーソルがそのままゲームの命中精度と一致するようなら風などの誤差を考える必要はないだろう。

「武器はこれでいいけど、こんなの人に見せられないしなー。」
「何とかならないかー。」と考えながら道に向かって歩いた。結局思いついたのは次元魔法だ。

「これは、単なる魔法だからさつきみたいなの呪文じゃないだろうけど。どんなんだろう？」

というか。この世界の魔法は詠唱系なのか無詠唱系なのか儀式系なのかさっぱりわからない。こいつときはやはり適当に。

「空間術式、次元空間発動。」

ぶつちやけ言々と成功した。ただ、あらわれ方が怖かった。何もない空間に目が開くように割れたのはびつくりした。

中をのぞいてみるとそれなりの広さがあるがやはり限界がある。大きさを指定しなかったのでそうだったんだろう。今度は大きさを指定してみる。

「空間・時間術式、無次元空間発動。」

今度は先が見えないほど広い空間が出来た。おまけにこの空間に物体を送り込むと時間の停止の有無が出来るようになった。これなら倉庫としての役割を果たせるだろう。

「とにかくこれで持ち運びの心配もしなくてよくなったな。」

この無次元空間もそうだけど意外と魔法も便利だな、色々使えそう
だ。

もっていたアサルトライフルを入れて今度はこんなことをしてみた。

「空間・時間術式、無次元空間発動。入り口を行使者の右ポケット
に繋げ。」

そう言っつて右ポケットに手を突っ込んでさっきの銃を出す。
うん。

成功した。

これなら緊急時にすぐさま武器が出せる。
しかし、分別して入れたいので次なる実験。

「空間・時間術式、無次元空間武器庫、食糧庫、材料庫、金庫発動。」

すると今度は四つの入り口が出てきた。中身はまるで同じだがこれ
で分別することが出来るはず。

武器庫の方に銃をいれてさっきと同じように唱えてみた

「おおー。ちゃんと入っている。」

さっきと同じようになっつていた。これで問題は無いだろう。

また、いちいち言うのもめんどくさいので固定をしておいた。
これならすぐに出せるからだ。

「こつちの方は、これでいいとして問題は……。」

後の問題は町なただけど問題はどつちかなんだよなー。どうしよう。

こつという時こそ魔法だ。なんかいい魔法は無いかな。

一番いいのは探査魔法かな。

これを広範囲にかければ人の集まっつている場所が分かるはず。

やってみようそう言って手を前にかざした

「風魔法・空間術式、探査魔法発動。」
すると自分の脳に直接リーダーのように周りの地形などが分かってくる。

少しして自分の向いている方向に町があることが分かった。
距離がどのくらいか分からなかったが。どうしても今日じゅうにつけないようだったらまた能力を使えばいい話だし。
竜也はのんきに考えながら街に向かって歩き出した。

第一話 ご利用は計画的に（後書き）

いきなりチートな武器を作ってしまった。
しかも、まだまだチートを上げる予定です。

第二話 人生は上手くいかない(前書き)

忙しすぎて間違えて投稿してしまったので。

直しました。

第二話 人生は上手くいかない

「やーっと着いた!!」

歩き始めて3時間くらいたって段々空が赤くなり始めた。

このままじゃまずいと思ったので途中から能力を使っただけでここまでできた。

使った能力は縮地。

滅茶苦茶な速さにびっくりしてこけそうになったのは危なかった。

なんせ高速移動中に転べばひどいことになるのはば確定だった。

ちなみにこれを使ったら30分位で着いた。さっさと使えば良かった。

「む？旅人か？」

おおー。門番がいるこの世界では当たり前かもしれないけど。門番さんは俺の服装に興味があるようだ。この世界に、上下黒のジャージなんて無いもんね。

「はい、まだ駆け出しで田舎から出てきたばかりで。」
挨拶もそこそこに入ろうとする。

「待て！」

え？何々？もしかして通行税を払ってやつ？勘弁してくれ。俺無一文なのに。

「何ですか？」

表面上は平静に。

「君はこれからどこに行くんだい？」

どうやら、通行税云々では無い様子。

「お金を稼ぎに来たんですけど。今、どこか開いていますか？」

「この町は今の時間帯にはもう店が閉まっているんだ。数件の武器防具屋や酒場や宿屋ぐらゐは開いているが金を稼げるのはもう開いていないはずだ。」

マジデ。

「そうですか。じゃー今日は宿に泊まって明日から仕事を探すことにします。」

正直に金がないと言ってもいいのだがそれでどうにかなるわけでもないので適当に言うことにした。

「そうか。うむ。気をつけてな。」
めっさいい人。

「はい。」

さてこれからどうしよう無一文なので宿に泊まれません。仕方なく俺は裏路地に入り人気のないところまで行きます。何するのかわかって？それはこれからのお楽しみ。

「ここら辺でいいだろう。・・・ん？」

奥の方と後ろから人の気配がする。

人数は三人。

後ろに一人、前に二人。

おそらく、あまり育ちのいい部類ではない。視線に多少殺気がこもっている。

が、竜也にとってはそんなことはどうでもいい。

（まいったな。人目につかないどころか悪い人たちに目を付けられたな。仕方ない、彼らにはおかえりしてもらおうか。）

もちろん話し合いで解決出来そうもないので力にものを言わせる方法で。

来た道を引き返そうとしたが痩せた男が前に立ちふさがった。手にはナイフを持っている。

慌てて逃げるフリをしたが後ろから二人分の靴音が聞こえる。完全に挟まれた。

「よう兄ちゃん。こんな奥まで何の用だ？」
後ろのリーダー格ツぽいやつが話かけてきた。

「道に迷ってね、でももう大丈夫。帰り道が分かったし。」
すつとボケた反応をするが、三人とも声を押し殺して笑っている。必死に虚勢を張っていると思っっているらしい。

三人に気づかれぬように観察する。

一人は痩せたナイフ持ち。

一人は中肉中背だが髭を生やしている男。

もう一人が二mもある巨漢でこの路地じゃ狭そうだ。

「そうかそうか。なー兄ちゃん俺たち結構苦しい生活してんだよ。兄ちゃんの持っているもの全部くれれば、俺らもう一度やり直せんだ。」
「だからよーと言ってくる。」

「兄ちゃんの持ってるもん全部ここに置いてっってくれ。」

ヒヒヒと下品に笑って迫ってくる三人組み。対して俺は。

「そうなんだ。でもあいにく俺は金を持っていない。」
そう言ってみるがだからと言って彼らがいそいそですかなんて通す
わけない。

「嘘はいけないよ兄ちゃん。」

そう言ってリーダー格の男はナイフ持ちに目くばせする。
それを受け取ったナイフ持ちが後ろから迫ってくる。

(もういいだろう。)

次の瞬間思い切りナイフ男に後ろ蹴りをお見舞いする。

「ぐえっ!!」

吹っ飛んでいくナイフ男。

「てっ、てめ〜!!」

リーダーが掴みかかってきたが逆に俺が掴んで頭突きを入れてやっ
た。

「ぶごっ!!」

鼻を押さえて転げまわる。その後ろにいた巨漢が殴りかかってきた。

「この野郎!!」

当たる寸前にかがみこんで突っ込んできた巨漢の腹に正拳突きをく
らわす。

「うぐっ!!」

さらに襟と腰のズボン辺りを掴んで柔道の肩車の要領で地面に叩き
つける。

「ぎゃっ!!」

三人片づけたが五分もかからなかった。

片づけ終わったので適当に脅しておくことに。

「二度とその顔を見せるな。」

こう言えば大抵のやつらはビビって逃げる。

三人は「ヒィ〜。」と言いながら逃げていった。

今度こそ誰もいなくなった。

「よし。始めるか。」

空中に手をかざしあるものをイメージしながら。

「空想物固定。用途は武器。種類は剣。名前はロングソード。数は三つ。空想具現化。」

同じように光、そこにはロングソード（鞘に入っている状態）があった。数は指定した通り三つ。これを武器屋に売って資金を稼ごうという魂胆だ。

「さーて、武器屋武器屋。」
大通りに出て店を探す。さすがに裏路地をつろつろしているわけにもいかない。

十分位歩き回ってこじんまりした武器屋を発見した。

（あそこにしよう）

まだ明りがついていたので急いで入った。

カランコロンッ

店に入ると店主と思わしきおっちゃんが店じまいしている。

「すみませんお客さん。もう店じまいなんですけど？」
申し訳なさそうに言ってくる。

ふむ接客態度は悪くない。ここで売ろう。

「ちょっと買い取って欲しいんです。とりあえず見るだけでもいいので。」

ロングソードを机の上に置く。

仕方なし、という風に机に置かれたものを見る。スンマソ。

しかし、一本鞘から抜いた瞬間眼の色を変えた。

「こ、これは。中々上質のもですね。」

感心するように他の二本も見る。いえ、適当に作ったものですよとは口に出しても言えない。

「どれくらいで買ってもらえますか？」

多少安くされてもそれでいいや。というかお金の価値基準が分からないので判断のしようがない。

「そーですね。この剣三本ですと銀貨五枚でどうでしょう？」
銅貨じゃなくて銀貨か。まずまずかな。

「それでお願いします。」

「はい、こちらが代金になります。」
「どうも言って受け取る。」

「ついでにいい宿場が無いか聞いてみよう。」

「ここら辺で、安くて快適で飯が出る宿ってありますか？」
「図々しかも知らないが武器屋をやっているんだからそこら辺は結構知っているはずだ。」

「それでしたらこの店の向かいの宿などはどうでしょうか。今の条件にぴったり当てはまっていますよ。」
「向かいが宿だったんか。武器屋探してたから気付かなかった。」

「おっちゃんに礼を言って向かいの店に入った。」

第二話 人生は上手くいかない(後書き)

すいません。

前回の話は一話ずつ飛ばして投稿してしまいました。

すべて、レポートが悪いのです。

さて、今回は竜也君の異世界初のバトルです。

雑魚がかわいそうな程の強さです。

第三話 簡単錬金術講座 始まるよー？

美味かった。

食事を終えて自分が泊まる部屋に向かう。

食事をしながら宿の女将さんに泊まる旨を伝えといた。

一階が酒場兼受付。二階が宿泊部屋という風になっている。

この店は他の紹介されている店と違って有名ではない。
意外な穴場というやつだ。

部屋に入るとベッドに洗面台（風呂場つき、水は後で魔法で出す）
の二部屋。

窓から見える景色は意外とよく見える。

値段の割にはいい部屋だ、しばらくここで生活するか。

これからのことについての想像を膨らませる。

ポジティブと言えば聞こえはいいが単に能天気なだけの竜也なのである

さてこれから色々実験する前に空想具現化の能力で付随しなければ
ならない能力を作った。

まず、魔法の無詠唱。これのおかげで念じるだけで魔法が使えるよ
うになった。

また、使うには俺の意思が必要不可欠になっているのは暴走を抑え
るためだ。

次に、詠唱・無詠唱・能力発動の簡略化。

いちいち長つたらしいこと言わなくても簡単に発動できる。

ただし、一度唱えてあるものだけの限定的なものだ。

さらに、高速自動記憶読解。

これは本など書物の絵や文書などを高速で読み、一期一句覚える能力だ。

今はまだ、使わないけど後々使うだろうから。

そして、肉体強化の永久上昇効果。

これは特に体を動かして無くても、筋肉の増量、反射神経・動体視力の上昇、骨や関節などの強度の上昇、内臓や聴力、視力の強化、第六感の発現などが一日ごとに増えていく能力である。

欠点があるとすれば一日増える上昇率はその日のマックスゲージ（例えば体力の最大値）1%程だということだ。

即効性はないが大器晩成型の能力だ。

ちなみに、魔法の肉体強化もあるので最初は使う機会が多いだろう。

最後に錬金術の能力だ。

これは武器防具の改造や薬品の調合などの完全バックアップ能力だ。ステータスを上げることは空想具現化で出来るが錬金で素材を変えらるともしたら思わぬ効果が得られるかも知れないからだ。

他にも家を建てたり、壊れた部品の再構成等もできる。

やり方は、某漫画の錬金術と同じだ。

手をパンと叩くあれである。

以上五つの能力。

後々変更や追加もする予定だが、今はこれ位で十分だろう。

さて、次は錬金術で試したいことがある。

「世界最高の金属を作ること!!」

実は、夕食を待っている間に鉱物の本を見つけたんだ。

酒場の隅っこにあるスペースに町の観光などの本が置かれている中ぼつんと一つだけあった。

女将さんに聞いてみたところ、鉱物学者が見聞を広めるためにおい

て行ったらしい。

早速読んでみたが（ちゃんと文字も読めました）、あまり興味がわかなかった。もうそろそろ、読むの辞めようかと考えているとあるページが眼に入った。

『希少金属の一覧と特性について。』

なかなか興味深く、今後の参考にもなると思い読んでみていくつかの鉱石を重点的に見てみた。

アダマンドイト：色は黒で希少金属の中でも特に手に入りやすく、ダイヤよりも高値で取引される。

特性、単体だけでもダイヤ並みの硬度だがいくつかの良質な金属と混ぜ合わせると破壊不可能なまでの硬度に至るらしい。

ヒイロカネ：色は純金とほぼ同じだが、比重は鉄よりもはるかに重い。

特性、術式・魔法などの効果を無効化できる。また、魔力や神力などの回復が出来、鉱物単体で失った魔力などを時間をかけて鉱物に蓄積することができる。

ミスリル：鈍い銀色の鉱石で他の鉱物と混じっていることがある金属。

特性、他の金属と混ぜると大幅に軽くなる。

オリハルコン：青みがかかった色で、希少金属の中でも稀有な特性を持つ。

特性、他の金属と混ぜると大幅に他の金属の特性を上げることが出来るらしい。

地球のと随分違つところがあつたがそこは異世界といつことで自分を納得させた。

他にも色々書いてあつたが、特に役立ちそうなものをピックアップした。

「まずは、四つの金属を作り出すか。」

さつき作つた能力が早くも活躍する。

まず、ロングソードを四つ作り出して錬金術で一kg程の鉄塊にする。次に四つの金属をそれぞれの金属に変換する。

シューウウウウウウー！

これで、出来上がり。

「錬金術、ばねー。」

うわー、すぐに出来ちゃつた。なんだか達成感わかねー。

正直ここまで簡単にできるとは思っていなかつたので自分の実力にあきれ返つた。

しかし、このままつてのも面白くない。というわけで錬成を試してみることにした。

「まずは、アダマンタイトとミスリルからやってみるかな。」

二つの金属を両手に持ち、錬成し混ぜ合わせる。

すると、ステータスウィンドウによく似たものが出てきた。

『特性の引き継ぎを行いますか？』
引き継ぎって何だ？まいいや、やってみよう。

OKする。

今度は、項目があるウィンドウに変わった。

破壊不能と重量軽減というものだ

その項目はミスリルとアダマンタイトの特性だった。

（はは〜ん。特性の引き継ぎってそういうことか）
チェックチェックと言いながら特性にチェックを付けていく。
どうでもいい話だが項目やその他の能力はチェックでオンオフ出来るようになっていた。
次に進む。

『ステータスの数値を入れ替えますか？』
また出てきたな。

これも、OKにする。
すると、三つの枠があるウィンドウになった

名前：なし

硬度：なし

延性度：なし

物理防御力：なし

魔法防御力：なし

重さ：？

レア度：？

特性：破壊不能、重量軽減

これは新しい金属の方かな。

名前：ミスリル

硬度：80

延性度：30

物理防御力：55

魔法防御力：11

重さ：100g

レア度：6

特性：なし

ありゃ、特性が無くなっている。引き継ぎをしたからかな？

名前：アダマンダイト

硬度：300

延性度：200

物理防御力：250

魔法防御力：50

重さ：1Kg

レア度：10

特性：なし

こっちも同じようになってる。しかし、アダマンダイト性能高いな。

名前や硬度の項目に触れてみるとそれが入れ替える対象になり、自由に入れ替えられる。

(こうなっているのか。まー、いじる必要ないな。)

ステータスをデフォルトのまま次へ。

一体何個あるんだ？少々げんなりしながらぼやいた。

第三話 簡単錬金術講座 始まるよー？（後書き）

これで、ようやく話がつながりました。

さて、ついに出了ました錬金術。

今後活躍が期待される能力です。

ちなみに、一番は何と言っても空想具現化なのです。

これだけは、譲れません。

第四話 簡単錬金術講座 はじまるよー？

『ステータスの数値を加算しますか？』
加算？

首を捻りながらもOKする。

さっきと同じような形でウィンドウが出てきたがこれは。

（入れ替えていないパラメーターに錬成した二つの金属がそのまま数値として加算することが出来た。しかも、これ自動的に全部加算されるので後は自分好みに変更すればいいだけだ。
こんなに錬金術が大変になるとは思わなかった。達成感わかないとか言っでごめんなさい。

それが最後だったみたいで錬成が完成する。

出来たのは灰色の金属があった。

ステータスを開くと。

名前：なし

硬度：380

延性度：230

物理防御力：305

魔法防御力：61

重さ：1.1Kg

レア度：16

特性：破壊不能、重量軽減

ホントに加算されている。でも、重さのところはいらないな。いじるのは簡単さけど、毎回いじるのはなー。

何とかできないものかと考え続けて三十分。特性に新たな特性を付けなければいいという結論に達する。本来ならそんなことは出来ないのだが、そこはチートでごり押しする。

早速付ける前に、いじくってほとんど重さをなくす。これをやっている時気付いたが、鉄と違ってパラメーターの上限が大幅に上がっていた。

(よし、これで重さは無くなった。)
いじくり終えたら次はいよいよ特性の付与だ。

「対象物固定。用途は付与した対象物のパラメーターの固定、種類は特性、名前は指定されたステータスの固定。空想具現化。」
長ったらしかったが、何とか成功した。
ちなみに、重さを指定した。

この『指定されたステータスの固定』はいくつもの固定が出来た。

(さてお次は・・・)

「この金属と、ヒビイロカネにしよう。」

さっきと同じ手順で同じように錬成する。
特性を引き継がせ、数値を入れ替えずに加算だけやってみた。
すると、

名前：なし

硬度：540

延性度：295

物理防御力：405
魔法防御力：81
重さ：100g
レア度：24
特性：破壊不能、重量軽減、魔力・神力無効化、魔力・神力回復、
魔力・神力蓄積

となった。重さはミスリルと同じくらいに設定した。
ちなみに、ヒヒイロカネの性能は、

名前：ヒヒイロカネ
硬度：140
延性度：65
物理防御力：100
魔法防御力：20
重さ：4Kg
レア度：8
特性：
という風になっていた。特性は、例のごとく引き継がれたので無くなった。というかヒヒイロカネ重すぎ。
鉄の4倍って。

だが、この実験で特性が正常に働いていることが分かった。
さて最後にオリハルコンと混ぜ合わせる。
その前にオリハルコンステータスは、

名前：オリハルコン
硬度：*10
延性度：*10

放心から抜け出した竜也はこの金属に名前がないことに気付いたので名前を付けることにした。

(どんな、名前がいいかなー。)

あーでもない、こーでもない。散々悩んだ挙句。

「・・・オルコン。そうだオルコンにしよう！」

ついに名前が決まった。それを新しくできた金属に命名する。音声認証で。

名前を付けた後、この金属を使って鎧を作ることにした。

空想具現化能力で自分の姿に真っ黒なオルコンで出来た。甲冑姿を浮かべる。

「空想物固定。用途は防具。種類は全身鎧。系統は西洋の甲冑。数
は一つ。金属はオルコン。性能を完璧に再現。名前はオールプレー
トアーマー。空想具現化。」

まばゆい光に包まれて、自分の体に真っ黒な甲冑を付けた自分がいた。

しかし、

「うわわわ！前が見えない！」

視界が真っ暗だった。本来なら格子のように作るか、穴をあけて視界を確保するのが普通だがそんな知識竜也には無かった。

作り直すのも面倒なので特性を付けることに。

その名も『視界透過』。

これは自分の視界の部分だけ透過できるものだ

これで、視界を確保できた。

動いてみてもいつもの調子と変わらないし、重くも感じない。

この状態で魔法を使おうとしたけど、出来なかった。おそらく特性のせいだろう。

このままじゃ魔法は使えないのでその特性を空想具現化で変更した。

『魔力・神力無効化』から『魔力・神力無効化 - 外側のみ有効』。

これで普通に魔法が使えた。

(そういえば、魔法は使えなかったのにどうして空想具現化の方は使えたんだろう?)

一瞬疑問に感じたが、分からなかったのでそれ以上は考えなかった。

いったん甲冑を武器庫に入れておいた。後で防具庫を作っておこう。しかし、ハイスペックすぎる。しかもまだまだ改良することができそうだ。

次はこの世界で通用する武器の製作だ。

やはり、刀。脇差(小太刀)。メリケンサックが定番だろう。

何故、メリケンサックも付けたかと言うと、刀や脇差はオルコンで出来ていて折れないが万一紛失した場合に備えてだ。

ちなみに、メリケンサックもオルコン製だ。

武器を作った後、技も作ることにした。空想具現化で。

刀系2つ。小太刀2つ。メリケンサック1つ。

西洋の甲冑に刀って変だよなーと、ぼやきながら装備をした。

余談だが、この甲冑姿を見た人々は『暗黒騎士』と呼んでいた。
別に悪いことしてないのに……。

第四話 簡単錬金術講座 はじまるよー？（後書き）

今回は少し、短めです。

甲冑をハイスペックにしたのは、遊び心です。

甲冑に刀は、パスタを食べながらご飯を頂いている感覚です。

でも、あれってものによっては結構いけるものもあります。

次は、いよいよクエストの受注編です。

そこでもチートがさく裂。

第五話 傭兵とギルドと鎧と（前書き）

相変わらず不定期で申し訳ないです。

第五話 傭兵とギルドと鎧と

昨日の内に風呂に入って防具庫を作り、その中にオールプレートアーマーを入れておいた。

自分で言うのも、何だが几帳面など俺にあったんだな。

眠って、久比ぶりに夢を見た。

夢の中で修業させられた。

夢から覚めた時は軽く落胆した。

『今までは全て夢』そういう淡い思いがあったが、現実の現実はまだあった。

俺は顔を洗い朝食を食べた後部屋で準備をしていた。

鎧を付ける前に銃の状態を確認する。

実は、ステータスウィンドウの外側の色がそのまま対象の現状になりのだが、それはまた次の機会に知る。

異常がないことを確認した後、気付いた。

(この銃の弾って、予備無いよな?)

マガジンを抜いた。これを何とか複製したかったのだが仕方が分からない。

仕方なく、具現化能力で複製を作った。五つほど。さらに弾薬庫も新しく追加したのでそこにいれておいた。

甲冑に着替え、刀と小太刀を帯刀しメリケンサックを手にはめる。

実ははめるのに苦労した。全身金属で覆われているイメージで作ったので指の部分覆われていたからだ。

装備を整えた。この部屋には鏡がないのでその姿を自分の目で見れない。見ていたらもう少しまともな感じに出来ただろう。

「よし！忘れ物はないかな？」

そもそも荷物なんてこれ以外ないことに気づいて苦笑する。

「出発だ！」

部屋を出てしつかり鍵をかけた後町に出る。

女将さんは俺の姿を見て驚いていた。

そんなにこれって怖いのかな？

お金はその時に払っておいた。

この世界には全身を覆う甲冑なんて物は存在しないことを知らない竜也であった。

「ここが、ギルドか。」

目の前のギルドは傭兵ギルドでいかにもという感じのギルドがあった。妖精の尻尾とモンハンを組み合わせたような感じだ。

ここに来るまで大変だった。ギルドの場所が分からず人に聞こうともその甲冑のせいで皆殆どモーゼの如く人の波が割れた。

声をかけようとすればみんな逃げていくし、近寄ろうとしただけで戦々恐々していた。

仕方なく、そのまま耳に入ってくるささやき声の情報をもとにギルドを探した。

やっと、見つけたと思ったら。それは商業ギルドだった。郵便局に行ったら、間違えて市役所に来てしまった感じで恥ずかしかった。そのギルドに入った時も。

「あの、すいま「きゃー！」「……。」
悲鳴を上げて窓口にいた人は叫び声をあげた。ひどい
その後、奥の方からお偉いさんが出てきて、自分の探しているギルドに最も近いのが傭兵ギルドということを教えてもらった。ついでに場所も教えてもらった。いい人だ。

てなわけで只今傭兵ギルドについてポカーンとしていたわけです。ポカーンも一通り終わった後早速中に入ってみました。

店に入った途端シィンとなったが竜也は気にせずそのまま受付に行
った。

受付には二人いて。一人が居眠りしていてもう一人が必死に起こそ
うとしていた。

「あー？」

「あ、すいませんちよつと待ってください……さ……い。」
受付の人も固まっていた。叫び声を上げなかつたが、そのまま固ま
ってしまった。そろそろ人間不信になりそうだ。

「ここに登録したいのですがどうしたらいいんですか？」
このまま、いつまでも固まっていそうだったので強引に切り出した。

「は、はいっ！ここに、この用紙に、ササササイン、し、してく
下さい！」

後半が噛みまくっている。渡された紙に自分の名前と性別、年齢な
どを記入していく。

その間も受付の人は緊張で汗ダラダラ。もう一人はグウすか。傭兵
たちは相変わらず黙ったまんま。息苦しい。

「はい。」
書き終えた用紙を渡す。

「ししし、申請しますの、です少しおまおまお待ち下さい！リリース！リリース起きてくれ！寝ている場合じゃない！！！」
隣の受付嬢を必死に起こしている

「ふわ、もうなにヤーケン君？」
お、やっと起きた。

「ぼぼ僕はこれからし申請に行くてくるからここ、この人のああ相手を……。」

「ふわーい、了解。」
そういうとこちらに向き直った。

「こんにちはー。」
どうもこの娘はユルキャラらしい。

「ちよっ！リリース！」
慌てて彼女の口を押さえる、・・・ヤケンだったっけ？

「気にしないでいいよ。それより申請を早くね。」
こくこくと無言で頷いた後、奥の方に行った。

「登録にはどれくらいかかる？」

「そうねー、場合によるけど遅くとも一時間はかからないわ。」
この娘は俺を見ても怖がらないらしい。ここにきてようやくまとも

な人に。

あれ、目からポカリが。

「ねえねえー。君ってさー。」

「うん？」

ひとしきりポカリを流した後、俺は何でも答える気になった。

「魔物とかそいうの？」

Why? 何故に? 見れば傭兵さんたちも中には脂汗を流しているやつもいた。

「だって、そんな全身真っ黒な防具付けてる人いないよー?」
それで皆引いてたわけか。

「俺は、魔物じゃないよ。・・・ほら。」

頭の部分だけ脱いで見せる。

「あー、ホントだー。」

子供のように目を輝かせている。

被り直して他にこんな鎧は存在するのか聞いてみた。

「ないよー。こんな全身真っ黒なの。」

甲冑はこの世界には存在しないみたいだ

「じゃあー「おい」はい?」

後ろから声をかけられたので振り向くとそこには二mもある筋骨隆々の男がいた。

第五話 傭兵とギルドと鎧と（後書き）

すいません、思いのほか話が長くなってしまいました。
でも、もう少し続きます。
チートは次にあります

第六話 して良いことと悪いことはちゃんと考えてから実行するべし（前書き）

この間初の感想をもらいました。

おまけにPV一万超えていました。

書いてた本人からすればびっくりです。

この作品を読んでもる人に感謝を。

それでは始めます。

第六話 して良いことと悪いことはちゃんと考えてから実行するべし

.....sideリリース.....

まずい、止めなきゃ！

逆上した傭兵はこのギルドの中でも上位の実力者だ。

戦ったらいくら鎧を着ていても切られてしまう

「ま、待って。ギルド同士の決闘は禁止されているよー！」

そういったが喧嘩を売られた当の青年は呑気に言った。

「大丈夫だよ。俺はまだ登録してないし。」

(そういうことじゃ無いのに！)

心の中で突っ込んでこれから切られるであろう青年に逃げると告げようとした。が。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ！！！！！！！！！！」

すぐそこまで来てもう警告は無意味だ。

(もう間に合わない！)

これから起こることに目をつぶる。しかし。

ギーンッ

カランカラン

人が倒れた音がしない。

恐る恐る目をあけるとそこには傭兵の金属性の大剣が半ばからきれいに切断されその後ろで立っている青年の場面だった。

- - - - - side out -

リリースが何か言おうとしていたが竜也は気付かない。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ！！！！！！」

傭兵が大声を上げながら切りかかって来る。うざい。戦意を喪失させるために武器を斬ることにした。技は親父直伝ので。

抜刀
一閃
納刀

これだけの作業だがほとんど誰にも見えなかった。

ギンツ

カランカラン

すれ違いざまに斬ったのでいま、大男の傭兵は後ろにいる。襲ってきた傭兵も見えていた傭兵も息を飲んだ。

大剣を斬り裂いたことに驚嘆したようだ。

「武器は、その状態だし。どうする?」

呆けたようにしていた大男の傭兵は一瞬で立ち直り、「ま、まだだっ!」と叫んで何やらぶつぶつ言っている。

すると、周りに炎の玉が八つ現れた。

大きさはちょうどバスケットボール並だ。

こいつ魔法も使うのか。似合わん。

「はははは!どうだ。これでもまだやるか!?」

おそらく剣技では勝てないため魔法で勝負ということだろう。

「火炎魔法。ファイヤーボール。発動。」

面白いので俺もやってみることに。

人差し指を天井に向け俺の知っている魔法を唱える。
いやー。

ファイヤーボールはやっぱり基礎だよな。

「へ、なんだその小っこいのは!」

大男の傭兵はゲラゲラ笑う。

俺のファイヤーボールは最初に小さく作っておいた。
笑ってられるのも今のうちだい。

ファイヤーボールに大きくなれと心の中で念じる。

「「「「「なっ!」」」」」

他の奴らも驚いている。

まー、手のひらサイズの火球が一気に十数倍になったのには誰でも

驚くだろう。

というか熱いな。なんか熱気だけで火傷しそうだ。

(甲冑に後で新しい特性でも付けようかな)

件の傭兵はその圧倒的な魔力と技量に腰を抜かしていた。集中力が切れたためか男が出した炎の球は消えている。

「まだやる?」

ブンブンと必死に首を振る傭兵。

「よろしい。」

ちよつとやり過ぎたかな?

戦意喪失したやつには目もくれないでリリースのところまで戻る。

「なー、リリース。待っている間依頼書見たいんだけど、どの程度がいいんだろう?」

リリースに最初はどのランクで始まるのか聞く。が。

「……。」

「リリース?」

「……。」

「おーい?」

「……。」

「ふっ。」

「ひゃー!!」

あまりにも茫然としていたんで耳に必殺の「ふっ」をやってやった。面白い反応だ。

「なななななな!!!!」

「おっ、気がついた。」

「何したのっ!?!」

「えっ?耳にふっただけだよ?」

「い、いい君!そんなこと他の女性にはしちやダメだよ!」

今までのゆるゆるは何処えやら。
凄じ剣幕で迫る。近いって。

「あー、うん。分かった分かった。あ、俺本条竜也。竜也って呼んでくれ。」

「リユーヤ?珍しい名前ね。」
やっぱり珍しいよねー。他人事みたいに呟く。おっとそんなことより

「なー、リリース。俺の最初のクエストって何がいいかな?」
餅は餅屋に。いくらゆるくても、それくらいの検討は立てられるだろっ。

「最初に受けられそうなくエストってこと？・・・うーん。それならこのF？Dまでねー。」

紙の束を取り出して数枚の紙を見せる。

「どうしてF？Dまで？」

「あー、そっか。まだ説明してなかったよね。それじゃー。まずはギルドの説明からね。」

本当は申請してからなんだけど。」

・・・。

ふむ。要約するとこんな感じ。

ギルドにはそれぞれカードがあり、ギルドに入ると配られる。

クエストには討伐、捕獲、退治、護衛、雑事の五つある。

そのランク付けはF？Sその上の特級がある。

ランクを上げるには自分のランクの上のものを受ける。

一つ上は二回、二つ上は一回成功するだけでランクが一つ上がる。

受注したあと契約破棄、または失敗すると違約金を支払う場合がある。

受けられるクエストは一つ。

受けたクエストはそのギルドでしか報酬を支払わない。

こんな感じだろう。まだいくつか言っていた気がするが。まあー、

覚えていないなら大したこと無いだろう。

「以上よ。分かった？」

「ああ。あんがと。」

礼を言った。ちょうどその時ヤーケン君が帰ってきた。

「お、お待たせしし、しました！どどどどどぞギルドカードです！お、これがギルドカードか！金属で出来てる。」

「そそそ、それではギギギギギルドのごごごご、ご説明を……。」

「あ、ヤーケン君。それ、あたしがもう説明したよ？」

「え？ああああ、そつそうでしたか！」

涙目になりながら、安堵のため息をだすヤーケン君。もう、俺は常時恐れられる人決定だな。

「どうするー。依頼受けていく？」

リリースは満面の笑み。見ているこつちまで頬がにやける。もっとも兜越^{ヘルム}して周りに気付かれなかったが。

「それじゃー、これで。」

ギルドランク：D

報奨金：銀貨二枚

契約金：なし

依頼：討伐

依頼主：ただの釣り人

討伐対象：キングジャー

特記事項：無し

依頼者コメント：ミナール川で釣りをしていたらいきなりキングジャーに襲われた。

逃げ切ることが出来たのだが、奴はそこを縄張りにしやがった。

このままじゃ俺の大好きな釣りが出来ねー。

一刻も早く討伐してくれ。

まるつきりモンハン。まー金を稼ぐには討伐依頼がもってこいだろ
う。

「いきなり、大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。」

この鎧は破壊不可能ツすから。

「そう。じゃー、はい。受注したわよ。」

印鑑を何処からか取り出し版を押した。依頼書を俺に渡す。

「サンキュー。それじゃ言ってくるね。」

受け取った俺はそのまま町の外に出た。

場所が何処だか分からずにまたうろろろするはめになってしまった。
今度から地図を買おう。

第六話 して良いことと悪いことはちゃんと考えてから実行するべし（後書き）

お待たせしました。

次回から本格的なクエスト開始です。

どんなモンスターにするかは決まっていますが、
肝心の出会い方を考えている最中です。

第七話 意外なところに盲点がある

うーん。

別にトイレにいるわけでは無い。

ここには、キングジャーナー（メンドイので以後K・Jと呼ぶことに）を討伐に来たのだが。

「何処にいるんだろう？」

一応目的地のところまで来たんだけどそれらしき影は見当たらない。というか

「K・Jってどんなモンスター何だ？」

最初のクエストってことで舞い上がってしまったため聞くのを忘れた。

今度から開いている時間帯は図書館に行つて知識を入れておこう。

「まーキングツて言う位だからでかいんだろうけど。」

ここまで来るのに数々のモンスターに襲われた。

空飛ぶ電気クラゲ（見方によっては某ゲームに出てくる回復魔法を使うにつつきやつ。）

狼（ただし、大きさは猪よりも一回り大きかった。）

恐竜（モンハンのゲポスみたいなやつ。）
等々に襲われた。

全部返り討ちにした後、材料庫に送つといた。

町からそう離れていないのに、こんだけエンカウント高いのにはびっくりだ。

ただの釣り人さんあなた何者ですか？

「駄目だー。やっぱり見つからん。」
かれこれ二時間位探しているのに全く姿形無い。

「まさか、空飛んで帰ったのかなー？」
そもそも空飛ぶのか？

「はあ？。しょうがない探査魔術使ってみるか。」
探査魔術は意外と使える、感知の対象を変えるだけで探査範囲にあるものなら必ず反応する。

おまけに、図体がでかいとそれだけ反応が大きくなる。
最初から使えばいいと思ったのだが、まあーそこはほら冒険を楽しむというやつす。

探査してみると川の下流の方に反応がでた。

行ってみるがやはり何もいない。
上空を見上げてても何もいない。
となれば残されているのは……。

(下?)

地面を見るが穴なんて開いていない。
モンハンなら音爆弾でも使うんだけど、あいにく持っていないし。
だもんで直接魔力ぶち当てることにしました

「マ タースパーーーーク!!!!!!」
手のひらを地面に向けてぶっ放す。

簡単に地面がえぐれていく。

「弾膜はパワーだぜ！」

決め台詞も忘れずに。

と

何か中からもそもそと出てきた。

「フシヤヤヤヤアアアアアアア！！！！」

。。。。

えー。

そこにはでかい

カニがいた。

「拍子抜けしたー。」

ぶっっちゃけもつと凄いの出てくるかと思ったのに。

カニは猛然とこっちに突っ込んでくる。

うおっ！危ねー。

カニのくせになんて素早い動き。

おまけに異様にハサミの部分が高い。

將軍キ ザミ？

なんて、おバカなこと考えてないでさっさと倒すべき。

「ここぞ、あつたが百年目。いざ尋常に勝負！」

実際、初対面でしかも探して二時間くらいしかたっていないが、そこら辺は雰囲気というやつである。

刀を抜き斬りかかる。

すでに魔術で体を強化してあるから問題なし。

ガキイン！ガキイン！ガキイン！！

三連撃叩きこんだが、甲羅の部分は予想以上に固い。

というか、俺の本場は刀の斬り合いではなく殴り合い。所詮、剣術は付け焼刃にすぎない程度。

刀を鞘に戻し回避に専念する。

（あの技を使う時が来たな・・・。）

一度距離をとり、技を放とうとしたとき。

ブシャー！！！！

奴め口から泡吹きだしやがった。

いや、気絶してないけど。

しかし、直線なのでかわしやすい。

左に回り再度技を放つ。

「フ エノキワミアーーーー！！！」

・・・ネタであるが、ちゃんと威力はある。

しかし、これをもってしても甲羅に穴をあけることしかできなかつた。

もう、面倒なので秘密兵器を使うことにする。

ちょっと芝居かかったセリフ。いや、遊んでいるわけでは無いんだ
けど。

それにしても、このまま全弾撃つても倒れるか心配になってきた。
まっ、ぶっちゃけ奥の手として魔法が残ってるし。

カチッ！

また、弾が切れたので空マガジンを抜いたとき
今までの仕返しとばかりに突っ込んできた。

まずっ！

よけようとしたが間に合わず。

ドンッ！

と体当たりを受け激しく地面を転がった。

「いつてえええ！」

どうやら防御力は無敵のようだが、衝撃力だけは消せないようだ。

これは、早めに対策を練っておかないと。

幸いに距離が離れたのでマガジンを装填してさらに撃つ。

ババババババババババババババババババババババババババババ
ババババババババババババババババババババババババババババ
バババババババババババババババババババババババババババババ
バババババババババババババババババババババババババババババ
バババババババババババババババババババババババババババババ

(いくらなんでも、これだけ撃ちこんだんだ。このマガジンで最後にして、最後は魔法に切り替えよう。)
とか、考えていると。

「キシヤヤヤアアア!!!」

何やら万歳してクタツとなった。シンジャツタ?

少し警戒して近づいたが何も反応しなかったので、これにて依頼達成となる。

「はー。疲れたー!」

この強さにはもうびっくりだよ。モンハンなら上位級確定だね。

しばらく草原で寝そべって体力を回復させる。

体の熱がひき始めたところに体を起こした。

何はともあれ依頼は達成したんだ、後は討伐の確認をすればOKである。

そういえば、こついう場合って何かの部位が討伐の証になるんだけど。

何処だろう?

足?

いやいや。

ここはやはりハサミなのでは?

意外と目玉とか?

結局分からなかったなのでこのまま持ち帰ることに。

(重いだろうなー。)

推定体重は二七くらいだろうか？

こういふときは魔法に限る。

ということで転移魔法を使うことに決めた。

K・Jを材料庫に転移させる。

転移は一度行ったことがあるならどこでも、どんなものでも転移できる。

これで、よし。

俺も、疲れたし飛翔魔法でも使って帰ろっか。

いざ、発動しようとしたとき

地面が揺れた。

第七話 意外なところに盲点がある（後書き）

やっとここまで来ました。

やっぱりチートだね主人公は。

そーなるように仕向けたのは自分だけだね（ニヤリ）。

今回登場した技は大抵の人だったら知っているとだと思います。

はい、完全に作者のネタです。

著作権？

ナニソレ？

第八話 百聞は一見に如かず

いきなり地震!?

やばいどうしよう!

こんな時は机の下に……。

ってここに机はネエエエエ!!!

突然の事態にメタパニを食らったみたいに慌てる俺。

はたから見れば、逝っちゃってる人みたいに見えるだろう。

あれ?何か字が違うような?

揺れは一層ひどくなりもう立っているのも出来ないほどだった。

しかし、突如揺れは収まった。

はれ?

周りを見回す。

さっきまでの揺れが嘘のように周りの風景は静かだった。

(町の方は大丈夫かなー?)

震度は絶対に7位あった。これだけ大きかったら町にも被害が出て
いるはずだ。

町の方を見てみたが煙などは上がっていない様子。

視線を落とすとそこにはここに来るまでは無かった不自然な土のふ
くらみがあった。

何かアリ塚みたい。

竜也の頭の中には某ゲームで巨大なアリさんが巣穴からわんさか出

てくるもの連想した。
そんなことを思っている。

ゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！

『地面が盛り上がっています。新しい巣穴です。破壊してください。』

無理です。俺はそこまで勇氣ある某兵士さんじゃないんです。

土はどんどん盛り上がり二m位になったところで。

ズシヤヤヤアアアン！！！！

巨大なものが出てきた。

蟻ではなく。

それは一見超巨大な蛇みたいに見えたが。

「ミミズかよ！？」

それも滅茶大きい。いったい何メートルあるんだろう？
と。

ブシヤヤヤアアア！！！！

空気の抜けたように口を開く。

ウワア？。グロッ！

そこにはイソギンチャクの如し触手がウニヨウニヨ。

正直これは気持ち悪くなる。

ブシヤヤヤアアア！！！！

例の如く襲いかかってきました。
多分餌かなんかと思っっているんだろうね。

さっきのカニと比べたら遅すぎるので難なく回避する。
そのまま巨大ミミズは地面に潜って行った。

あれー？何か嫌な予感するよ？

そういう予感は元来外れた試しがない。
急いで立っていた場所から離れると。

ズシヤヤヤアアアン！！！！

また、地面から現れた。

今には流石に冷や汗が流れ落ちる。

もう少し動くのが遅ければ……。

ブルブル！！

恐ろしいので考えたくない。

なおも俺に愚直なまで突進してくる、巨大ミミズ。

いい加減よけるのにも飽きてきたので反撃開始。

刀を抜いて斬りかかる。

「オリヤーーーー！！！！」

ズバツ！

カニと違ってあっさり切れた。

いける。

そのまま二撃目を叩きこむ。
今度は思い切り力を入れる。

ズシャツ！！！！

さっきよりも深く切れた。

致命傷である。

ズドーン！！！！

ミミズは倒した。

「ふー。に、二戦はさすがに堪える。」

最初はK・J。

次に大きなミミズ。

いきなり人外、それも大型の魔物2体の連戦はいくらなんでも疲れる。

同じようにミミズを材料庫に転移させた。

さて、帰るには飛翔魔法が一番なんだけど・・・。

なんか、異世界のお約束というかどうしても試してみたいことが
とりあえずやってみた。

「アイ・キャン・フラアアアイ！！！」

おおー！浮いてる浮いてる。

（この分だと他の魔法にも使えそうだ。）

ニヤニヤ笑いながら街の帰路に就いた。

余談だがこの魔法以外即席の魔法は出来なかったそうなのらしく。

「ただいまー！」

ギルドの扉を開け中に入る。気分は出張帰りのサラリーマン。

「お帰りなさい。」

リリスが出迎えてくれる。ヤーケン君はいない。

「討伐してきたよ。」

「それじゃ、討伐の証としてハサミを見せて。」
「やっぱりハサミだったか。」

「ごめん、ここじゃちょっと。」

「え？でも討伐してきたんでしょ？」

「うん、まあ。」

余計なものもいたが。

「あ。もしかしてハサミとって来るの忘れちゃったとか？
というかどれを持ってくればいいのか分からなかったのよ。」

「いや、そうじゃなくて。丸々一体持つてきたんだけど、こじじや狭くて取り出せないんだよ。」

ギルドはそれなりに大きいがK・Jを出すには狭すぎるしね。

「……。えっと、何処にあるのかな？」

「信じてないね。」

「だって何処にも無いじゃない。」

まあ、確かに甲冑と武器を携帯しているだけだから仕方ないが。・
・そうだ！

「そうそう、クエスト以外の魔物って狩った場合どうすればいいんだ？」

「基本的に自由だよ。ギルドに売るもよし。鍛冶屋や研究者に持つていくのもよし。あ、でも一応ギルドでの報告はしておいてね。」
パッチリウインクする。可愛い。

「こいつらっていくらで売れるかな？」

材料庫から数体の魔物の死骸を取り出して見せる。

「……。」

ありゃ？茫然としている。

「ね、ねえ。これどこから出したの？」

何て説明しよう。

ドバドバドバドバドバドバツ!!!

一気に出したので裏庭はすぐに満杯になった。
あのカニやミミズも出しておいた。

「それじゃ。鑑定お願いします。」

「は、はい。」

リリスにある程度聞いていたようだがそれでも驚きは隠せないようだ。

鑑定が終わるまでギルドの中に戻り一つの席に座って待っていた。

第八話 百聞は一見に如かず（後書き）

最近執筆スピードが落ちています。

でも、ちゃんと完成させますので温かい目で見てください。

第九話 嘘つきは泥棒の始まりって言うけど仕方ない嘘は罪にはならず(前書き

いつの間にかお気に入り登録件数が百を超えていました。

感無量の限りです。

感想をくれた人もいました。

これからもどしどし感想をください。

誤字脱字でもかまいません。

それでは始まります。

チートな異世界戦記！

第九話 嘘つきは泥棒の始まりって言うけど仕方ない嘘は罪にはならず

遅いなー。

かれこれ一時間近く立っているのに何の報告も来ていない。すでに日が傾き始めている。

「まだかなー？」

さつきから同じ言葉しか出していない。ちなみに19回目だ。

周りには傭兵はちらほら見える。

だいたいの人が帰ったようだ。

一応俺も今後はお世話になるだろうし交友関係は広く持ちたかったので割とウェルカムの^{ヘルム}に兜を脱いでいたのだが、誰も話しかけてこなかった。

俺から話しかけようとしても皆逃げていく。

仕方なく席に戻りこれからのことにしてこれからのことを考えながら時間を潰していた。

考え事が終わってもまだ来ないので何かあったのかと思いちよつと様子を見に行こうかと考えて席を立った時、マスターがやってきた。

「リユーヤ様。鑑定が終わりましたので、奥の方に。」

「はいはい。」

いい加減帰りたくなったのでさつきとついて行く。

「……以上で合計した結果、白金貨一枚と金貨四枚。それと報酬の銀貨二枚ですお納めください。」

コインを七枚位渡される。色々あるんだな。

ポーンとそれらを眺めている。

「どうしました？」

価値基準が分からないんです。素直に答える。

「そうだったんですか。失礼ですが、何処からこの町に？」

おや、墓穴掘っちゃった？

「ここから離れた山に住んでいました。人里に下りたのは今回が初めてです。」

とりあえず、誤魔化す。

「なるほど。もしや、東の大陸からいらしたのですか？あちらの方でも同じような呼び方をされているようですし。」

話を合わせて大丈夫かな？

「ええ。色々旅をしたんですがこっちに来てからお金に関する事は全くなかったの。」

自分の首を絞めているような感覚に陥る。

「それは、また。大変でいらしたでしょう。それなら、私がお教えしましょうか？」

願ってもない。

「お願いします。」
即答する。

「では、まず。この大陸で一番価値が低いのは銅貨で、次に銀貨、金貨、白金貨となっております。銀貨は銅貨100枚、金貨は銀貨100枚、白金貨は金貨100枚となっております。お金の単位は各国様々ですが先ほど述べた硬貨はこの大陸共通ですのでご安心を。

この国ではこの硬貨を一般的に使われているので換金する必要はありません。」
うん、それは知っている。

「大まかなところはこの位ですね。あっ！そうでした。」
マスターは何やらごそごそしている。

「リユーヤ様どうぞこれを。」
渡されたのはギルドカードと同じものだった。色は違つが。

「これは？」
「これは、Bランク以上が持つことが出来るギルドカードなのです。リユーヤ様はBランクになりました。」
マジで？

「何で？」

「はい、リユーヤ様が倒したモンスターの中にソイルイーターがい
ましたのでそれで……。」

ソイルイーターって？

「ああ、失礼しました。ソイルイーターというのはとてつもなく大きなミミズで何でもかんでも飲み込んでしまう魔物でして。」
「ああ。あのミミズかそんなに有名なのか。」

「最近派出に暴れまわっております。数回討伐依頼が来たのですが、中々討伐出来なかつたんです。」
「あいつ、そんなに強かつたんだ。」

「我々も頭を抱えました。」
「おっさんが溜息出すな。幸せ逃げるぞー。」

「一個聞きたいんだけど。」

「なんででしょう？」

「そのソイルイーターの討伐ランクはどのくらいだつたんですか？」
「Bランク位かな？」

「ソイルイーターはSランクです。それも、本来ならチームで当たるのが常識なのですが。」
「俺は非常識ってこと？」

「本来なら間違いなくSランクになるほどのことなのですが。まだ、ギルドに入ったばかりですのでBランクが適当だと思つたのです。」

「そつか。それじゃーこれはもらつね。」

「鎧の隙間からポケットにしまおうとして、もう一つあることに気がつく。」

「そういえばマスター。これはどうすれば、良いんですか？」
最初に貰ったギルドカードだ。

「それでしたらカードを重ねてください。」

「？」

言われたと通りに重ねてみる。

シュン！

最初に貰ったギルドカードが消えた。

「あれ？」

落つことした？

「はい、それで大丈夫です。無事に更新されました。」

「更新？」

それと消えたのとなんの関係が？

「ギルドカードが新しくなった場合やランクアップされた場合。こうして前の情報も引き継ぐために更新するのは、規則で決まっていることですよ。」
ふーん。

「そうだったんですか。」

一言先に行ってくれ。イラン心配してしまった。

「問題なく更新されたので、後は今回のクエスト達成のハンを押す

だけです。」
あの印鑑のことか。

「それじゃー。早速やってきます。失礼しました。」
学校の時のくせが抜けてない。」

「クエスト達成したからハンをくれ。」
あー、リリースではなくヤーケン君です。色々と災難だね君は。」

「は、はい！少々、おま、おま、おま、おまください。」
プルプル腕が震えているよ。大丈夫か？

ポン！

震えながらも腕を押さえつけ何とかハンを押す。ヤーケン君。

「ほい、サンキュー。」
俺はギルドカードを受けとりさっさと出て行くことにした。ヤーケン君が可哀想だから。」

「はー、さっぱり。」

風呂からあがり濡れた髪をタオルで拭く。

あの後宿に帰り食事を済ませた後こうして風呂に入った。
風呂の水は魔法で大気の水分を凝縮しそれを熱して作った。
最初は加減が分からず温かったり熱かったりしたが、慣れれば楽だった。

色々なことがあり疲れたのは確かだったが、同時に収入源の確保など様々な情報を入手できた。

まだ、知りたいことなどは図書館などで調べる予定。

魔法などや他の鉱石の知識を手に入れば他に装備が作れるかもしれないし。

「さて、さっぱりしたし。早速甲冑の改造でもするか。」

真っ黒な色の甲冑を無次元空間から取り出し、ついでに他の武器も出しておいた。

余談だが鎧や刀に例の如く名前が無かったので甲冑にイカロス。

刀に鳳凰。

小太刀に麒麟。

メリケンに白虎。

という名前にしておいた。

カッコイイ名前が良かったのでこうなった。他意はない。

第九話 嘘つきは泥棒の始まりって言うけど仕方ない嘘は罪にはならず（後書き

はい、今回は武器に名前を付けてみました。

大体が架空の生物で構成されているため、そっちの方が名前的にも
しっくりくるのでこうなりました。

次の回は新たな魔法を使います。

第十話 内職って地味だけど結構役に立つ

イカロスには様々な特性を与えまくった。

状態異常回復：全ての状態異常を回復させることができる。

体力・気力回復：体力と気力が常時回復し続ける。

快適空間：乗り物や閉鎖空間的なものに発動し、例えば外がどんな状況だろうと内部にいる生物にとって、常時とても快適な空間になる。

外力のみ衝撃吸収・分散：外力の衝撃を吸収し体勢を崩しにくくなる。

自分から衝撃を出す分には問題ない。

気密結界：隙間を結界で塞ぐことで気密性をだす。水の中だろうと宇宙空間だろうと問題ない。*快適空間と連動するので空気なども生成される。

炎熱耐性：炎や熱に対する耐性が上がる。*おそらくマグマでも大丈夫。

氷冷耐性：氷や冷気の耐性が上がる。*液体窒素をぶっかけても問題ない。

熱疲労無効化：熱疲労をしなくなる。

と、まあこんな感じで結構付けたんだが。

空想具現化の能力は融通が利かないところもあった。

例えば『外力のみ衝撃吸収・分散』の外力のみを抜かして衝撃吸収だけにすると。

鎧を着た瞬間立っていられなかった。

おそらく全ての衝撃が吸収・分散されてしまい立つことが出来なくなってしまうのだ。

まあ、扱いをちゃんとすれば問題ないが。

さて、次は武器の方だが。

鳳凰と麒麟には。

破魔：悪魔や妖怪と言った怪物にダメージを与えることが出来る。

*別名退魔ともいう

霊力攻撃：霊体などにダメージを与えることが出来る。また、霊力に関する攻撃などに干渉することができる。

魔力喰らい：魔術などに触れると構成されている魔力を喰らい溜めることが出来る。

*魔力を失った魔法は消えてしまう。

結界破り：結界をたやすく斬り裂くことが出来る。

全属性：全ての属性を付与することが出来る。*魔力を送り炎のイメージをすると刀身が炎に、雷なら雷になるといった具合。

相手が生身の人間だけとは限らないとも言えないので霊力など様々なに対応できるようにしておいた。

というか、ぶっちゃけ。刃物系は扱うのが得意ではないので特殊な特性を付けておいてあまり使われないようにしたわけだ。

実は、与えたい対象の物体を重ねる（直接その物体が触れている）
ことで一回ので済んだのを知った。
これは、便利だ。

白虎には。

防御崩し：相手が防御をしても攻撃でそれを崩すことができる。

拳打力・速度3倍：装備時に拳の攻撃力（肘、裏拳を含む）と速度
が3倍にアップする。

無敵防御：相手の攻撃を自動で防御^{オート}することが出来る。連撃に対しても有効。

かなり使う機会が多そうなので出来るだけいい特性を付けてみた。
特に無敵防御はかなり使えると思われる。
そうそう。

イカロスや武器、オルコン金属にある共通の特性を付けておいた。

永久不滅：物体の耐用年数を永久にすることが出来る。

これは、結構重要だったりする。

魔法にどんなものがあるか知らないが仮に時間を操る魔法が存在し、
物体の時間の流れを早くすることが出来るならどんな頑丈なもの
もボロボロにすることが出来るからである。

「さて、他に何をしよう?」

大抵思い着いたものは試してみたのだが、まだまだ時間がある。
散々悩んだが結局は武器の開発をすることにした。

「まず、俺の知っている限りの武器をだそう。って、ここは狭いから何回か分けてやるう。」

竜也は早速いろんなものを作り始めた。

「これで終了。」

最後に出した武器をしまい一息つく。

まとめて出してはみたが、それでも竜也が持っている武器の知識はすさまじい量だったので20回程に分けて出したのだ。

ちなみに武器は全部オルコン製にしておいたので、壊れることはない。

「そういえば、まだ試してみたこいことがあったな。」

オルコン金属を取り出す。

「いつまでも空想具現化だけでもを出すのはまずいからな。魔法で生産してみよう。」

こいつ場合の魔法はあいにく知らないが。こいつときは恒例の適当で。

「全魔法・全術式、パーフェクユビ完璧複製発動。」

すると、オルコンが光だし収まるとおなじ形をしたオルコンがあっ

た。

「念のため性能を確かめてみよう。」
「チエックチエック。」

二つのウィンドウを開いてみたが全く同一の性能だった。
これで量産は問題ない。
さっそく取り掛かる。

（とりあえず、オルコンを百個位作るか。）

同じように量産するが。

「小さいのばかりだ。」
「同じような形になるのでそれは仕方ないと思っていたけど。」

このまま、材料庫に保管しても良いのだがもっとひとまとめにすることにした。
錬金術でいくつかの塊に形成したら、また同じようにといった作業を繰り返す。

そして、作ったちようどいい塊を材料庫にいれ余ったものはそれをまた錬成していく、
という作業を繰り返しおこないきりの数を作った。

「ここまでにしよう。」

余ったのを材料庫にいれベットにダイブする。

「まだ、時間あるな。」

寝るにはまだ二時間早い。

竜也の体内時計は正確で外れたことは無いほぼ間違いない。

だが、他にすることが無いのでベットの中でグダグダ言うこと以外
することが無かった。

「暇だな。」

あーあ、武器とかは全部作っちゃったからもう何も作れないしな。
そういえば某ゲームに登場していた銃はどうして、役に立たない物
があっただらう。

威力はバカ高いのに弾が一発でリロードに時間がかかるやつとか、
滅茶苦茶弾速遅いやつとか。

そこまで、考えてあることが思いついた。

「そつだ！種類が違う物を錬成したらどうなるんだらう!？」

早速、オルコンを取り出して、・・・。

あと、何にしよう？

うーん・・・。

服にするか。

何も考えないで決める。

錬成してみると見たことの無いウィンドウが出てきた。

『種類を選択してください。』

また、何か出てきたな。って言うか種類？

とりあえず、進んでみる。

そこには、服が金属かの二種類のチェック欄しかなかった。

（うーん。ここで金属にしちゃったら俺着る服なし。ここは服にしておこう。）

服にチェックを入れた後、予備を作っておけばいいということにとで気づいた。

そんなときは自分の能天気さを初めて恨んだ。

後は同じように順調に作業していく。

「完成。」

見た目何も変わらんけど。

しかし、この発見で面白いことを思いついた。

まず、イカロスを取り出して、それを複製する。今度は複製したイカロスとジャージを錬成する。すると、あら不思議。

防御力無限の最強のジャージが出来てしまった。

「やばい、面白い。」

こうなると歯止めが利かなくなる。

とりあえず、このままここで実験するには不都合なので、無次元空間で試験場を作った。

その中に入り込み実験するためだ。

「わくわくするなー。」

そうやって無次元空間の中に入り込んだ。

第十話 内職って地味だけど結構役に立つ（後書き）

前回の続きです。

今回はちよつこつとだけ長めです。

自分で文章書いてるときに「あ、これいいんじゃない？」的な感じでした。たしていったら。

こうなってしまうました。

さて、今回は読んで分かるかと思えますが主に作業がメインです。

この、作業は後々大変役に立つときがきます。

心の片隅に留めておいてください。

忘れてもかまいませんが。（笑）

第十一話 リアル無知に腕輪（前書き）

ちよこつと早めの投稿です。

第十一話 リアル無知に腕輪

ピヨピヨと小鳥が鳴いる音で目が覚めた。

起き上がってみると。

なんと、甲冑を着たままだった。

そして昨日のことを思い出して、一気に疲れた顔と溜息を出した。

「昨日はホントに大変だったなー……。」

何が大変だったのか。

それは割愛するが一部を言おうと。

あるゲーム（読者の何人かは気付いているかもしれない）の追尾性の高いミサイル兵器。

この中に特殊なものがある。

それは、空に向けて撃つた場合。

しばらくの間真っ直ぐ飛び続けるが、ある所まで行くとミサイルが分裂して地上に降り注ぐ。

この兵器に同じミサイル系の一度に複数発射する物を錬成したらどうなるか。

答えは簡単、雨あられのようにミサイルが降ってきた。

さらにこの兵器に最強のロケットランチャー（破壊力が規格外）を錬成したら。

正直に言ってイカロスがなかったら誤爆してた。

さらにいくなれば、あるアサルトライフルに弾が999発撃てるのがある。
これを、また錬成する。

といった具合に最後は『これ一つあるだけで国を落とせる兵器』をたくさん作ってしまった。

中にはあまりにも使えない兵器があったが、それは無次元空間で作った『危険物庫』の中に放り込んでおいた。

そうそう、弾や重量（軽い）、反動（同じく）、リロード時間などは特性でそのままにしておいた。

錬成で組み合わせた場合を考えてだ。

予備の武器も大量に作っておいた。

また何か思いついたときに作れるようにだ。

それに、弾薬の方は昨日の内に作っておいた。
割と大量に。

「ふー。」

昨日のこと思い出すのは後でにしよう。

まずは今日一日の予定を組むことにする。

最初は飯を食って、その後部屋にいったん入り支度をやる。

次にギルドに行って、何か依頼ないか探す。

無いパターンも考えて色々模索する。

「ようし。じゃあ今日も一日がんばりますか！」

昨日の実験でハイテンションが抜けきっていないのに苦笑して顔を

洗いに行こうとする。
あること気づいてしまった。

「なんてこった……。」

今日の一日のスケジュールをぶち壊してしまうことを。

「完璧複製パーフェクトコピーでお金を作れるじゃないか!!!」

今まで気がつかなかったのが不思議なくらいだった。

「はあ〜。」

いきなり働く意欲を思い切り自分で無くしてしまつて落胆した。

「よし。くよくよしてもいられない。お金を作ろう。」

ホント。自分で思うけど俺って立ち直りの早さギネス級じゃね？

くよくよしていた時間は30秒。

人類が驚嘆するのは間違いない。

とりあえず白金貨一万枚ほどコピーしとこう。

ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ
ジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラジャラ

メダルゲームのコインみたく出て来た。

こうなるとお金のありがたみが全くない。

だが、これで資金の心配が無くなった。

(さてこれから何しようか?)
部屋の中でぐるぐる。

「うーん?」

キュピーン!

その時歴史は動いた。
じゃなくて閃いた。

グ~~~~~。

.....。

「.....。まずは飯を食おう。」

さしあたってすることが決まった。

飯を食べた後、竜也は町に出た。
食事をしながら今後の生活を考えていた。

「やっぱり家が必要だよな。」

近くにあるアクセサリーの出店の帽子を被ったおっちゃんに聞いて

みた。

「ちょっと聞きたいんだが？」

「・・・一つ。」

「？」

「何か一つ買っていけ。それで答えてやる。」
まあ、それが普通だな。

「それじゃー・・・。これにする。」
金属製の腕輪にした。安そうだし。

「金貨一枚だ。」
バカ高い！

「た、高いんだねこの腕輪。」
というかゆづに半年は普通に暮らせる額だ。

「それは、カラストナの作品だ。高いのは当たり前だろう。」
「どうやら何かお宝を当ててしまったようだ。いや、この場合はずれか？」

「ほい。」

まあ、この位は良いか。

金貨一枚を渡す。

「ほう。これが偽物とは思わんのか？」

何か爆弾発言しなかったこの親父。

「偽物だった時は社会勉強の代金だと思っさ。」
「マジで偽物でも、俺にとっちゃそんな大した損でもないし。」

クツクツクツと笑う親父。

「剛毅な奴だな。安心しなそいつは正真正銘のカラストナの作品さ。」
「本物のようだ。」

「それで、聞きたいことってのは？」
「やっ和本題。」

「実はこれから家を買おうと思っているんだけど。どこで買えばいいのかわからなくて。」
「聞いてみると親父は少々啞然としていた。Why？」

「・・・それを聞きに来ただけなのか？」

「そうだよ。」

「ふっ・・・。」

「？」

「はっははははははは！！！」
何か突然笑い出す。びっくりさせんな。

「情報屋に来て町に行けば簡単に手に入る情報を聞くとは。」

まだ、笑っているよ。つてか、情報屋？

「情報屋なのか？」

「そつだ、俺はこの町で情報屋を営んでいる。バレイス・クロツサ
ーと言えば分かるか？」

「いんや、分からん。」

正直に答える。だつて本当に分からないし。

「なるほど、最近入つたド田舎きた青年とはお前のことか。
もうそこまで知っているのか。」

「まあね。つていうか情報伝わるの早くないか？」

まだ3日位しかたっていない。

「情報屋は情報が命！些細な情報でもとつておくのさ。」
かっこいい。

「そついえば、どつちが副業？情報？それとも出店？」

「いや、どつちとも本業だ。出店はいい隠れ蓑だからな。」

そつ言つてニンマリと笑うバレイス。逞しい。

「それで、家を買つんだつたよな。それなら商業系ギルドに行くん
だ。場所は……。」
ちゃんと教えてもらった。

「でもどうして商業ギルド何だ？建築とかそつち方面じゃないのか。」

「

至極当然の疑問だが。答えはすぐに帰ってきた。

「まあ、そう思っていてても間違いじゃない。商業ギルドは文字道理商売を主にしている。建築ギルドは建築。つまり……。」

「家を建てるのが建築。それを売ったり紹介するのが商業ってこと。」

「その当理だ。中々物分かりいいな。」
常識が無いだけでバカではない。テストの成績も後ろから4分の1位だ。

「じゃあ、商業ギルドに行くか。ありがとな、バイレス。」
お礼を言う。

「礼はいいさ、また何か聞きたいことが出来たらまた来な。まけといてやるよ。」
いいね。利用するかは分からんが。

「ほんじゃ。」

竜也は出店を出て、商業ギルドに足を運んで行った。

第十一話 リアル無知に腕輪（後書き）

どうも作者です。

最近厄介なレポートや課題があつて中々執筆が進みません。

でもめげずにがんばります。

この小説を楽しみにしているみなさんがいるなら、たとえ鬼のような怒涛の宿題ラッシュが来ようが、戦場のご真ん中によろが。

明日世界が終りになりそうでも執筆はやりませぬ。

なんだか題名が意味分からなくなってきた。

五万突破記念（前書き）

いつの間にか総合PV五万超え。

ユニークは一万突破。

五万突破記念

S「みなさんおはようございますこんにちわ、こんばんわ。作者の
sasuraiです。」

竜「本条竜也です。今回は総合PV五万、ユニーク一萬突破記念で
す。」

S「といっても大したことしませんけどね。」

竜「おおーい！聞いてねえぞ！！こっちは記念だからそれなりに豪華なことをやると思っていたのに。見る！この日のために、スーツ着てんだぞ。」

S「どうせ小説だからわかんないよ。」

竜「ちくしょー！！！！」

S「しかし、いつの間にかこんなにいつていたとは書いている自分自身びっくりです。」

竜「ほんとに。この小説は作者が初めて投稿した作品なのに。」

S「自分でもまだまだ未熟と感じているのにね。」

竜「だったら精進しろよ。こんな小説でも読んでくれているひと居るんだろ。」

S「自分でこんななんて言うなよ。品位を下げるぞ。」

竜「まあ、そうだな。どっちにしても読者の皆様これからもよろしく願います。」

S「お願いしまーす。」

竜「それでは本題に入りましょう。」

S「おー！」

竜「それで今回は何やるんだっけ？」

S「君の紹介だよ。今までやろうやろうとしたけど、話の関係で区切りのいいところが中々無くて。」

竜「そうだった。でも、そんな紹介することあるのか？」

S「何言っただよ。主人公だぞ。あーだこーだ言うより見ろよ。」

本条竜也

実家は古武術。

漫画やアニメなどの知識もかなり豊富。

地球では仙病で死亡。

異世界の能力、空想具現化能力。詠唱が必要なのはイメージを強くするため（妄想ともいう）

錬金術、肉体強化の永久上昇効果、高速自動記憶読解、詠唱・無詠唱・能力発動の簡略化、魔法の無詠唱。

S「お前のスペックは素でも相当なもんだぞ。」

竜「そりゃ親父に色々やられたもんなー……。」「（遠い目）」

S「細かい話は本編で話すとするとしよう。それはそうとあのゲームやったことある？ほら、ヤクザの人がバトルするゲーム。」「

竜「ああ。龍が〇くね。」「

S「名前出すなよ。」「

竜「別にいいだろ、大抵の人は知っているだろうし。」「

S「いいけどね。それで。」「

竜「やったことあるぞ。というかあのゲームの主人公のバトルスタイル、家の流派だぞ。」「

S「マジで？」「

竜「マジで。いつだったか親父のところにゲーム会社の人に来てな家の流派を教えていたぞ。」「

S「驚愕の事実がここで発覚！」「

竜「お前が考えたことだろ。」「

S「おっとそろそろお時間です。それではさよなら。」「

竜「あいつ逃げたな。」「

第十二話 悩みは人それぞれ

まいった。

本当にまいった。

何でまいったかと言つと。

「どこどこ？」

はい、絶賛迷子中です。

「つて言うかそれらしき建物が全然見当たらない。」

情報屋から建物の外観を聞けばよかった。何かこつちの世界に来てからドジになつて無いか？

何て事を考えながら歩いていたら前方をあまりみていなかった。

ポスッ！

「キャッ！！」

ドスン！！！！

特性のおかげで衝撃を感じなかったが。

ぶつかつちやつた人は驚いて足をもつれさせて、結果、
転んだ。

（何というか、ドジっ子なのかな？）

心の中で大変失礼なことを思いながら慌てて助ける。

「うわ！ごめんなさい！！だ、丈夫ですか？」

「あつ、いえ。こちらこそ。ご迷惑を。」

声の高さからして多分女の人だよな？ローブを着ていてフードをしているから顔が見えない。

手を差し伸べる。

おずおずとその手を取り立ち上がる。

その時、フサツ！とフードがずれた。

顔の全体は見えなかったが、見えた顔は美人だった。

特にオッドアイの朱と青の瞳、そして銀色の髪がミスマツチ。

「ッ！！！」

「？」

慌てて顔を隠しちゃったんだけど。どうしたんだろう？

「すつ、すいません！」

慌て逃げようとしている。

逃げだそうとしている女の人の手を掴む。

突然のことだったので条件反射が働いてしまった。

「あ、あの？」

さっきよりも怯えている。まずい

「えつと……。」

何て言おう。

と思っていると彼女の後ろから何者かが迫って来る気配がある。

「もしかして追われているの？」

「。。。。。」

だんまりか。

だが見たところ悪い人ではないと彼のカンが告げている。

幼いころから色々な修業をやらされた竜也はある程度人を見抜くことが出来る。

それに、カンが外れたことはない。

悪い方ではあるが。

「こつち！」

「えっ？」

少女の手を引つ張り街の中を走る。

後ろから、彼女と同じフード付きローブを羽織っているので顔が分からない。

しかし、何というか戦士のような足運び。

武術を習っているなら一目で見抜けるほど独特な足運びだ。

そんなことを考えていると前から同じような服装の奴が待ち構えている。

（挟まれた！）

竜也は隣にいる少女を抱きかかえた。

「きゃっ！」

「しつかり掴まって。」

身体能力を強化させて、

飛んだ。

周りには5メートルの建物が並んでいたが竜也は10メートルも飛んでいた。

周りの人や追っかけていたと思わしき人物も啞然としていた。もちろん腕の中にいる彼女も驚いている。

追っでの気配を振り切るためにいくつかの建物を飛び越えた。

10程の屋根を飛び越えてやっと追っでの気配をまくことが出来た。路地裏に降りる。

「もう追ってはこないようだな。」

「あ、あの……。」

「？」

「お、降りしてくれませんか？」

「あ。」

抱きかかえたままだった。

「ご、ゴメンゴメン。」

彼女を降ろし立たせる。

「いえ。」

赤い顔をしてうつむく。

(やっぱ、恥ずかしいよな。)

いきなり抱きかかえたのはまずかったのでは？
と、彼が考えていると。

「あの、ちょっと良いでしょうか？」

話しかけられた。何だろっ？

「うん。何？」

「あなたはこの町に住んでいるんですか？」

「まあ、一応？」

「お願いがあるんです。」
真剣な瞳でこちらを見る。

「私、この町を見たいんです。でも始めてきたのでどこがどこだか
分からないので案内してほしいんです。」
「
街の案内か。」

「うーん。」

俺もこの町に来たばかりだからそんなに詳しくは知らない精々大ま
かなとこ位だ。

「駄目でしょうか？」

顔を隠したままなので表情は分からないが不安そうな声で聞いている。

「いや、駄目では無いんだけど……。」

「お願いします!」

「……。分かった。でも、俺はここに来ただけだから詳しいところは分からない。それでもいいか?」

「はい!ありがとうございます!」

頭を下げてお礼を言う彼女のフードが完全に外れた。気付いた彼女が慌ててフードを被り直す。

「1つ聞いていいか?」

「は、はい!」

「何で、顔を隠しているんだ?」

「え?」

彼女は信じられないという声をだす。なして?

「えっと、私を見ても驚かないんですか?」

「?逆に聞くが、何処に驚く要素があるんだ?」
オッドアイのことを言っているんだろうか。確かに珍しくは有るだろうが。

なぜかホツとしたように彼女はフードをとる。

「いえ、その。瞳の色が違うものは大抵魔力が物凄く高いんです。それに魔法に関する技量も平均を大きく上回っていてその……。」
「なんかごによごによ言っている。要は強いから怖がるのでは無いかということだろうか？」

「ふーん、そうなんだ。」

「恐ろしく無いのですか？」

まあ、自分が一番恐ろしいし。

「いや、別に怖がるようなことでも無いだろう。」

「はあ……。」

なぜか釈然としないといった返事が帰ってきた。おかしいこと言っていないよな？

「そんなことより……。」

表道理に指を指す。

「何処に行きたい？」

めんどくさい話は無しにしよじ。

「は、はい！そうですね。」

彼女も歩き出す。って

「そついえばむ。」

「はい？」

「君の名前は？」

名前を聞くのをすっかり忘れていた。

「あ、はい。申し遅れました。」

一礼をする。礼儀正しい。

「私は、レイスと言います。」

「俺は本条竜也。竜也って呼んでくれ。」

「リニューヤさんですか？珍しい名前ですね。」

「よく言われるよ。」

予想していた返答に苦笑する俺。

「あー！ご、ごめんなさい！私ったら……。」

「いや、気にしないでいい。珍しいのは変わらないだろうし。」

挨拶も済んだし。

「それじゃー、何処に行く大まかなところしか案内できないが。」

「はい、それなら市場を覗いてみたいです。」

うん、そこなら知っているな。何とかなる。

「それなら、こっちな。」

フードを被り直して俺の後についてくる。

この突然の出会いは後に大きな運命に巻き込まれていくことになる。
必然で出会った彼らはどのようなようにして後の困難に立ち向かうのか。
誰の知る由もない。

第十二話 悩みは人それぞれ（後書き）

ついに生まれたヒロイン。

他の作品と比べて登場のタイミングはかなり遅いです。

本当はもっと遅かったんですが早めに登場させました。

何者でどんなことになるのかは次回ちょこっとだけ入れます。

第十三話 k y 人は何処の世界にもいる (前書き)

リアルの場合があり早めの投稿をします。

第十三話 kyな人は何処の世界にもいる

あれからいろんなところを見て回った。

市場に始まり、ギルドや港、倉庫や武器・防具屋等一般的なものを見た。

最初はおのぼりさんなのかと思ったが、何か違った。何とか何もかも初めて見たという感じで。

言葉使いも貴族が使っているような感じがしたし。

世間知らずの貴族の娘なのか？

まあ細かいことは直接聞けば良いか。

「とりあえず、主なところは回ったな。疲れてない？」

かれこれ、二時間位は歩き回ったからな。女の子にはつらいかも。

「いえ、大丈夫です。」

問題ないみたいだ。

「そっか。あ！あつちに広場があるけど行ってみる？」

もうひとつ見るべき場所がもう一つ有るのを忘れてた。

「はい！」

わくわくしているのが丸わかりの返事をしているよ。

大通りに入り城がある方向に向かうと真中に噴水がある広場に着いた。

遊ぶ子供たちの姿や買い物途中で立ち話している奥さんたち。

隅で露店を開いてアクセサリーや甘味を売っている。

「のどかな雰囲気ですね。とてもいいです。」

「そうだね。あそこに座って一休みする？」

疲れていないといっても疲労は溜まる。休める時には休んだ方がいいのだ。

「そうですね、それじゃ一休みしましょうか。」

フードで隠れているがかすかに微笑んでいるのが分かる。

噴水の近くにあるベンチに腰かける竜也とレイス。

「結構歩きましたね。」

うんと俺は返す。

しばらく二人は無言で遊ぶ子供たちや出店で商品を買う人たちを眺める。

(ホント、平和だな。)

竜也は武術の修業等で色々な場所に放り込まれて過ごしてきた。

中には彼自身が命の危機に瀕することが有ったのも一度や二度ではない。

そんなことを体験した彼だからこそ「平和」という言葉の素晴らしさは普通に暮らしている日本人よりも知っている。

「あれは、何を売っているんでしょうか？」

彼女の視線の先には果物の果肉を潰してそれを金属の箱に入れ、木の棒を入れ氷結の魔法を使ってデザートを作っていた。現代で言うアイスに近いものである。

「なんだろうね？食べ物みたいけど」

一応あれが何なのか分かっているがこの世界でどんなふうに呼ばれているか分からないので知らんふりをした。

「そうですね。美味しそうです。」

「喉も乾いたろうし買ってきてあげるよ。」

「えー！いいですよ。」

ブンブンと首を横に振る。

「ちょうど俺も喉が渴いているしついでだよ。」
「変に遠慮するのは分かっていたので自分も乾いていることにする。」

「そ、そうですね？それじゃお願いします。」

俺はベンチから立ち店の前まで移動する。

「はい、いらっしやい。」

どうやら若い女性が店主をしているようだ。

「これは何と言ってますか？」

「これは果物を使ったお菓子で氷菓子というんです。味はオレンジとリンゴ、それとバナナが有ります。おひとついかがですか？」
氷菓子か。かき氷みたいなものだな。というか果物の名前は同じなんだな。

新たな発見に驚きつつも店員にオレンジ味を二つ頼む。
お金を先に渡し受け取る。
走り回っている子供たちにぶつからないようにしながらレイスの居る所まで戻る。

「お待たせ、はい」

「ありがとうございます。」

氷菓子を手渡し二人で食べる。

「冷たくておいしいです。何て言うんですかこの食べ物？」

「氷菓子だって。これの他にもリンゴとバナナが有るみたい。」

「そうなんですか。」

しばらくの間は氷菓子のおかげで色々な話をしていた。
しかし、話に夢中で二人は公園の変化を感じ取れなかった。
最初に違和感を感じ取ったのは、竜也だった。

「あれ？」

「どうしたんですか？」

「……人がいない。」

「え？」

彼女も遅れて周りを見回し異変に気づいたようだ。

あれだけいた人の影は今は見当たらない。
すると、まるではかつたかのようにレイスをしつこく追いかけてまわっていた奴らが何処からともなく現れた。

「ちっ！」

すぐに氷菓子を捨てレイスの手を掴み反対方向に逃げようとしたが。

「！！！」

すでにそこにも追手がいた。

（十人くらいか。）

困んでいるのは皆ロープを羽織っているがそのうちの一人が前に出てきた。

「・・・お嬢様お戻りください。師範が待つておられます。」
少々低い声だが若い声だ。しかし、師範と言うのは？

「お願いです！もう少しこのまま・・・！」

「いけません！いつどんな輩がいるか分かりません。現に・・・。」
うん。何でおれの方を見る？

「そのような何処の馬の骨とも知らない者が寄ってきています。さ、早く安全な場所へ。」
酷い言われようだ。

「この方を悪く言うのは許しません！街を案内してくれた恩人なの

ですよ!？」

「街の観光など崇高なあなた様が行う行為では有りません。もうお戻りください。」
なんかイライラしてきた。

「・・・嫌です。」

「・・・しかたが有りませんね。」

全員がローブを脱ぎ捨てる。

彼らは全員皮の鎧を付けていて弓や剣、杖等で武装していた。

「それでは力づくでお連れいたします!」
リーダー格の人物はすっきりした顔立ちに紫色の髪をした美青年だった。

「ついでにその者にはお嬢様を誘惑した罪によりしかるべき制裁を与えます。」

ライライ。なんてこと言うんだ。

「待ちなさい!この方は無関係です!」
。 フォローは有りがたいが全員聞いちゃいないな。というかもう・・・。

「言いてえことはそれだけか?」
思い切り怒気を放つ。我慢の限界です。

「さつきから聞いてりゃ人のことを変人扱いしやがって。」
あまりの怒気に何人か怯む。

「しかも、レイスを力づくで連れて行くだと？」
一歩踏み出す。すると奴らも一歩下がる。

「お前らみたいなやつらに連れて行かせるわけにはいかねえな。」

竜也は父親から他人に親切にすることの大切さを耳にタコが出来る位言い聞かせられた。

「困っている人は助ける」。

「例えそれがどんなに強敵だとしても絶対に見捨てるな」と。
彼はそれを守ってきた。

いつしか彼は困っている人を見捨てられない人間になった。
それが、彼を突き動かす原動力になった。

「ふん、身の程知らずが……。」

そう鼻で笑いはき捨てる美青年。

「邪魔をするなら叩きつぶす!!」

こうして謎の追跡者と竜也の戦いの火蓋が切って下された。

第十三話 kyな人は何処の世界にもいる（後書き）

もう何というか書きずらいです。

かっこいいこと言わせようとしてもなかなか当てはまらないです。作者泣かせですね。

さて、次はほぼ丸々戦闘シーンになります。

難しいですが精いっぱい頑張って書きます。

誤字・脱字等がございましたらどうぞお知らせください。

第十四話 雨降って地固ま・・・・・・・・らない(前書き)

遅れてしまいました。

大変申し訳ありません。

第十四話 雨降って地固ま……………らない

sideレイス

「邪魔をするなら叩きつぶす!!」

周りの追跡者。

いや。

本当は彼女のよく知る人物たちが臨戦体制に入っていた。
各々の武器を構える。

彼らは私が知る限りの精鋭。

元論。

世界にはもつと強い人物がいることは知っている。
しかし、その人物がそう都合よくいるわけではない。
隣の人物を見る。

「？」

彼もこちらを見ている。

まるで今の状況が分からないような顔をしている。

(このような方が強いわけがない。)

彼女も武術の心得があるから分かる。

彼には武術家にあるべき覇気を感じられなかった。
つまり素人。

しかもこのような場面にあつたことが無いような。

(ここは私が時間を稼ぐしかない！)

この人数で勝てるとは思えない。
だが、しばしの間は稼げる。

ダツ！

追跡者らが動いた。

私は、前に出て庇おうと前に出る。
しかし、

バツ！！

それよりも前に彼が飛び出した。
しかも速い。

彼女も武術家なので動体視力は人一倍良い。
だが、彼の動きは見切れなかった。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

追跡者たちも驚いている。

ドゴッ！！！

一番前にいた短剣を掴んでいた者が吹き飛んで転がっていた。
吹き飛ばしたのはこの場でただ一人。
彼女が身を呈してまで助けようとした、青年だった。
レイスの常識が覆った瞬間だった。

- - - - - side out -

しばしのにらみ合いの後、一斉に襲いかかってきた。

自分だったらそんなのどうってことないが、今は後ろに守らなければならぬ存在がいる。

(まずは敵の数を減らすのが最優先か。)

自分の体を魔法で強化させ縮地を使い突撃した。
まず、一番前にいた奴に一気に近づいて、裏拳でぶっ飛ばした。

ドゴッ！！！

ゴロゴロと広場の端まで転がって行く。

(皆驚いているな。だが、それは命取りだ！)

また縮地を使い、相手の後ろに回り込み回し蹴りを打ち込む。

ガスッ！！！

盛大に顔面から倒れて昏倒する。

そんなことを繰り返して確実に無力化していく。

「固まれ！！固まってお互いの死角を補って牽制しろ！」

美青年が指示を出す。

真っ先に驚きから脱した確に指示を出すのは称賛ものだった。
あくまで常人の範囲でだが。

「オラッ！」

一番離れていた奴に近づき軽く怯ませて、両肩を掴み思い切りジャ
イアントスイングのようにぶん回した。

ブンッ！ブンッ！ブンッ！ブンッ！ブンッ！ブンッ！

「ドリヤァー！」

三人くらいにかたまっていた奴らに投げる。
砲弾のように飛んで行ってまとめてなぎ倒す。

「くっ！」

一人がレイスに向かって走り出す。
レイスは逃げようとするが。

「まあ待てよ。」
そんなことさせないぜ。

「ヒッ！」

俺はまん前に出てウターンして逃げようとする奴の襟と腰の部分を
つかみ持ちあげて、地面に叩きつけた。

他の奴らは家の壁に背を取り背後からの奇襲に備えていた。

弓を持っているやつは矢を番えようとしていた。

剣を持っているやつは前に突き出して正面からの攻撃に備えている。

「面倒だ。」

バスケットボールサイズの火炎を二百個位作る。
それを残りの奴らに一斉にぶつける。

ドゴン！！バゴン！！ドカン！！

盛大な花火が上がる。

一応言つとくがこれまでの攻撃と今の攻撃も含めてちゃんと手加減している。

いくら頭に血が上っているからってそこら辺は冷静だ。

「ふう。」
片づけたな。

そう思っていると爆煙の中から誰かが飛び出してきた。

あの美青年だ。

火傷の痕があるが真っ直ぐ向かってきている。

「もうちょっと待ってて。」

後ろにいるレイスに伝えて横に五メートル程移動する。

美青年君は進路を変えてこちらに来る。

この場での最優先事項が竜也を倒すことに変わったらしい。

（その判断は間違つたものじゃないな。）

彼は近づいて拳と足の連打を竜也に繰り出すがひらりひらりとかわす。

よく見れば彼は他と違って武装は手甲と脚鋼だけだった。素手で剣を持つ者に勝つには三倍の実力が必要だ。つまり素手対素手になれば実力差は三倍になる。

（まあ、俺もそのうちの一人なんだがな。）

避けながらどうでもいいことを考える。

完璧に見切っているので避けるのはたやすい。

いかに三倍の実力があるうと、竜也はそれ以上の実力がある。なれば、彼がどう頑張るろうと勝てない

なのに彼は攻める手を止めない。

むしろさっきより激しい。

「なあ、もう終りにしようぜ。どうせ実力差分かってんだろう。お兄さんは怒って無いからさ。」

「うるさい！！貴様のような危険人物にお嬢様を近づけさせるわけにはいかない！！！！」

あー、なるほど。俺があまりにも驚異的で、得体のしれない奴だから安全を確保しようとするのか。

逆上して攻め立てる。

かわし続ける。

（しょうがない、叩きのめすか・・・。）

右ストレートを左手でさばきつつすくいあげるように手首を回し、そのまま腕を脇に挟めがっちり固定する。そのまま右拳を腹に叩きこむ。

「ガッ。」

肩を掴み頭突きする。

「ぐわ。」

最後に背負い投げのように投げ飛ばして、顔面に拳をすれすれのところまで止める。

「。。。。。」

どうやら完全に戦う気が失せたみたいだ。

大の字に寝て茫然とこちらを見ている。

無視して立ち上がりレイスのところに行く。

「レイス。怪我はないか？」

「は、はい。おかげさまで大丈夫です。」

「そうか。良かった。」

とりあえず無事みたいだ。

「それで、どうする？」

「え？どうするとは？」

「こいつらのことだよ。」

襲撃者達を指さす。

「もし、まだ回りたいところがあるなら案内するけどこいつらに妨

害されるのは嫌だからしばらく気絶してもらおうとか。」

「……いえ。それには及びません。」

彼らに近寄るレイス。

「街の案内はもう十分してもらいました。そろそろ帰らないといけません。」
「そう言っただ倒れている奴らに目を向ける。」

「彼らは私の警護の者なのです。本来ならば私は家を出てはいけな
いのですが……。」
なるほど。それで血眼になって探しまわっていたのか。

「分かった。それはそうとこいつら治療してやるうか？」
襲そわれはしたが、自分でも結構やり過ぎた感じはした。

「治療ですか？」

「うん。殴っておいてなんだけど。」

「いえ、お願いします。」

「よし、それじゃ一か所に集めさせておいて。」

「？分かりました。」

一か所に集まる。

「ベホマズン！」

お詫びも兼ねて全回復の方がいいからな。

「す、凄い……。」

瞬く間に全員の傷がふさがる。

「これで、大丈夫だ。」

全回復だし。

「それじゃ、俺はもう行くよ。」

別れもそこそこにして立ち去る。

色々聞かれると面倒なんだ。

レイス達はただぼうつと彼が去って行くのを見続けた。

第十四話 雨降って地固ま……………らない(後書き)

今回は長めです。

おまけにほぼ丸々一話戦闘です。

やはり、戦闘シーンは難しいですね。

他の方の小説は短く終わらせることが出来るのに、作者はだらだらと長くなってしまいます。

次回は家を購入します。

十万突破記念（前書き）

気が付いたらすでに総合PVが十万突破していました。

いつも読んでくれている人に感謝。

十万突破記念

S「ひゃっほうー！十万突破だぞ、何喜んでんじゃー！」ふげらっ
！」

ドゴツ！バギツ！グシャツ！

竜「まったく。今の今までぶっ倒れていたやつがはしゃぐな。」

S「ふ、ふあい。」（顔面ほこぼこ）

竜「というか、本編入る前にこんなことやっていていいのか？読者のみなさんが早く読みたがっているんじゃないのか？」

S「そうなんだけどね。ほら、ブランクあるじゃないか。」（ギヤグ補正で治りました）

竜「いつも脳内で創造ならぬ妄想しているのはどこのどいつだ！」

S「ちょ！それは言うな。sasuráiの密かな楽しみで小説の根源なんだぞ！」

竜「うるさい。この中二病患者め！」

S「ひどい！おまえだってかなりアニメとかゲームやってんじやないか！」

竜「毎日見ていたわけじゃない。友達に言われて見たり、話題になったから見たりしてただけだ！」

S「どっちも同じなんじゃ……。」「

竜「違うわ！このオタク！」「

S「オタクじゃない！！」

竜「というか作者よ。」「

S「何だよ？」「

竜「お前最近調子に乗りすぎだぞ！？」

S「物語の主人公に言われた！」「

竜「これは読者の皆様に変わりOSIOKI が必要だな。」「

S「くふふふ。良いだろう。我が前に塵とかすがいい！」「

バシッ！ドスッ！ドスッ！ボンッ！ドゴーーン！
タタタタタタタ！ボキッ！プチ！ニョローン

竜「ふ、この俺に格闘で勝てるわけないだろう。」「

S「げふっ。っ、強くしすぎたぜ……。」「

竜「まー、これに懲りて今後まじめに……。」「

S「こうなったら奥の手を使っしかない！……！」「

竜「まだやんのか・・・？」

S「作者に唯一与えられた権限。物語の強制終了しか・・・。」

竜「ば、バカ！それは核爆弾落ちるよりも危ねー！！」

S「ふふん。ならば止めてみせる！じゃねー！！」

ビューーーーーーッ！（風のように走り去る）

竜「待てこの駄目作者！！！！」

ズドドドドドドッ！（ダッシュで走る音）

レイス「……私の紹介は？」

十万突破記念（後書き）

この話は作者が暴走したものであり物語の進行に一切関係ありません。

また、今までどおり話は続きます。

御心配には及びません。

第十五話 うまい話にご用心

「ここか。」

目の前にはちっちゃい城という感じの建物（成金と言っても可）がある。

最初はどっかの趣味の悪い貴族かと思ったが他の人に聞いたら苦笑いを浮かべてここだと言っていた。
成金屋敷と周りは呼んでいたそう。

「大丈夫かな？」

不安を覚えながらなりき……ではなく、ギルドに入って行く。

「次の方どうぞ。」

そういつた受付嬢が隣にある数字の書いた布（卓球やバレーボールで点数をカウントするやつに似たもの）をペラットめくった。
その番号が俺のと一致したのでその受付に向かう。

「いらっしやいませ。」

見事な営業スマイル。俺が店長だったら花マルです。

「家を買いたいんですが？」

どんな家があるかな？

「希望は何かありますか？」
「そうだな。」

「まず、町からちょっと離れたところで、それなりに大きくて庭付きのが良いですね。」

内は道場と言うだけあって広いには広いがまあぼろいからな。単純に大きな屋敷に興味があるし。

「はい、分かりました少々お待ち下さい。」
すたすたと奥に歩いて行く受付嬢。

2 3分待つと一枚の紙を持ってきた。

「お待たせしました。お客様の要望に全てかなっているのはこの屋敷ですね。」

どれどれ、フムフム。どうやら豪商の屋敷だったらしく中々広く豪華であるとのこと。
竜也は二つ返事で受けた。

「それじゃ、この屋敷をお願いします。」

「えっ！よろしいのですか？」
「なんで驚いてんの？」

「ええ、それでいくらですか？」
多少高くてもそれを買おう。

「はい、その・・・白金貨千枚です。」

高いなんてもんじゃないですぜ。

「ちよつとまっついてくれ。」

金庫からお金を引つ張りだし袋に詰める。まあ、白金貨一万枚作っておいたからそんなに大した出費ではないし。

「はい、白金貨千枚。」

どさり!!

千枚も集まるとかなりの重量になる。

「は、はあー？それでは数えさせていただきます。」

釈然としない顔で数えていくが次第にどんどん顔が白くなっていく。

「しよ、少々！少々!!お待ち下さい!!!!」

さっきとは違って慌てて奥に引つ込む。どうしたんだろ？

すぐに帰ってきた。

つてもう一人いる。

「お客様。こちらに別室をご用意いたしております。」
「なんだろ？」

「お客様、失礼ですが何のお仕事を？」

挨拶もそこそこに聞いてきたのは職業。素直に答える。

「傭兵です。」

「なんと、傭兵ですか！しかし、あれほどの大金いったいどこから？」

「あっ、それで。」

なんとなく今後の対応が浮かぶ。

「カンッ！！！」

なぜか試合のゴングが鳴った気がした。

「あれは、親の遺品を売れるだけ売って得たお金です。別にあやしくないですよ。」

「まずは牽制。」

「しかし、あの額は一般の物をどれだけ売ってもそんなになりません。」

「牽制を避けられてカウンター。」

「はい、何でもカラストナの作品だったとか。」

「カウンターを受け止めてボディに一撃。」

「なるほど、しかしいかにカラストナの作品でも一番高いので白銀貨百枚ですよ？」

おおっと。あえて真正面から受けて決めのアッパー勝負をする。

「…実を言うと、ギャンブルで賭けたらそれがもう大当たりで。」

危機一髪！ぎりぎりで避けきって後退したが、ダッシュで向かってくる。俺も力一杯いダッシュ。

「なるほどギャンブルですか。」

走りながら殴ってきた。

「ええ、そうなんです。」

対する俺も殴り返す。
勝負は一発。

「ふむ。」

「ふう。」

ゴンッ！！

両方に拳が入る。

「なるほどそうでしたか。疑って申し訳ない。」

倒れたのは相手選手！

「いえいえ、普通は疑うものです。」

勝者は竜也！見事なクロスカウンターでした。

「それで、家具などの方はよろしかったらこちらの方で手配します
が。」

な、なんと倒れた選手が不死鳥のように立ち上がった！！

「いえ、それは結構です。」

竜也選手、見事な踵落として相手選手を粉碎！

「そうですか。しかし、屋敷は広いですから何かと手間があります
よ？我々の方で紹介いたしましょうか？」

だがしかし、それでも立ち上がる！

「うーん。」

これには流石に怯む竜也選手。

「いえ、やはり結構です。必要になったらまた来ますので今日のと
ころは。」

これは、竜也選手が今にも倒れそうな体を支えています。今ここに
友情が生まれました！

「そうですか、それではお待ちしております。」

カンカンカンッ！！！！！！！！！！

試合終了のゴングが鳴った。

あれ？

なんで格闘技？

しかも漫画風に？

「話が長くなりましたな、それではお屋敷の方に案内しましょう。」

まあ、いいや。

町から出るとちらほらと家が建っている。

案内人にモンスターに襲われないのか聞くと。

「確かに、この前にもそういうことはありましたが。でも出てくるのは比較的弱いものが主ですので、村人が2 3人集まれば簡単に退治できるので心配はいりません。」

「やっぱ出るんだな。うん、その辺の対策もしておこう。」

ここまで来る間に色々なことを聞いて今後の屋敷の改造に思考を巡らせていた。

快適に過ごすためには元いた世界と同等の物にするために考えていた。

「あつ。そろそろ見えてくるはずですよ。」

馬車の窓から外を見る案内人。

ちょうど今は少し高低差のある丘を登ろうとしていたとき窓からそれは見えた。

「・・・大きいな。」

というかあれはもう豪商の屋敷ではない貴族の方だ。

見えた屋敷は遠目でもその姿がはっきり見える。

少々古い感じがあるが直せば使えないこともない。

馬車が屋敷の方に進路を向けたため見えなくなったが、期待に胸が膨らんだ。

思っていたよりも良いところだった。

「この辺りはモンスターもあまり寄り付かないところなので安心です。」

テンションがハイになっていなければ意味深に言った言葉に気がついたがハイになっていたので気がつかなかった。

「さあ、着きました。ここが今回お客様が購入されたお屋敷でございます。」

(うわ、なんか緊張してきた。)

めったなことでは緊張しないが今回はやはり緊張した。

馬車を降りていざ、マイハウスに・・・。

・・・。

アレ？

ナニコレ？

「お疲れさまでした。ここがお客様の購入されたお屋敷。妖精の園」です。「
いや、何言ってるんこの人。」

竜也の目の前には「妖精の園」の名前とは真逆のおんぼろ屋敷があった。

第十五話 つまい話に用心（後書き）

どうも作者です。

偶にありますよねこいつ話。

いわくつきの物件とか。

そいつのは格安というのが常ですけどね。

皆さんもうまい話には気お付けてください。

第十六話 思いついたら即行動って結構危ない(前書き)

そろそろ休みも終わりです。

第十六話 思いついたら即行動って結構危ない

草ぼうぼうの庭。

所々壁が剥がれおちている屋敷。

窓は、珍しいガラスで開閉できるようになっていたが穴が開いている。

まごつことなきぼる屋敷である。

これで屋根の上にカラスがいたら、ぼる屋敷からお化け屋敷にランクUPだ。

「おい、こんな話聞いてないぞ！って、あれ？」

隣にいる案内の人に文句言おうとしたらいつの間にかいなくなっている。

見れば馬車も無くなっている。

「や　ら　れ　た。」

これから苦情を言おうにも街から離れているので、今から行けば夜になる。

あきらめてここに住むことにした。

「庭とかは後回しにして。今はこの屋敷の改修かな？」

屋敷に入る前に探査魔法をかけて欠損しているところとかを探す。

「結構多いな。」

調べ終わったら屋敷に入り中の確認をする。

厨房や使用人室。

エントランスホールもあった。

「うへ、ほこりまみれ。おまけにカビ臭い。」
「どうやら随分ほったらかしていたみたいだな。」

破れたカーテンや床に落ちて半分割れている花瓶などまるっきり化け物屋敷だ。

片づけを後にして、修理に向かう。

最初に床が腐っているところは比較的無事な木材を複製し取り換え、剥がれた壁には作っておいたセメントで塗り固めた。

雨漏りしているところは屋根に上り取っ換えたりし修理したりした。その他色々やって全て終えたら夜になっていた。

「もうこんな時間か。寝る部屋だけ掃除して後は明日やろう。」

竜也の寝室は二階の西向きの部屋だ。

広く元々寝室として使われた跡があったのでそこにしたのだ。

箒で掃いたり雑巾で拭いたりして部屋が綺麗になったら食事をした。台所が無かったため野宿用の物しか作れなかった。

食事が終わるとベットを作って寝た。

なんだ一日で色々あったためその疲れが来たのだった。
ほどなくして眠りの世界に旅立った。

次の日。

竜也は早起きして身支度を整えたら本格的に掃除を開始した。

客室。

厨房。

武器庫。

様々な場所に行っては部屋の汚さに癖々した。

それでも手を休めなかったのは綺麗にしないと病気が蔓延する可能性があつたからだ。

最後の部屋に来た時に違和感を覚えた。

扉が少し開いている。

掃除は順番に行っていた。

最初に見たときはこの部屋の扉は閉まっていた。

(強盗? いや、山賊か?)

不思議なことではない。

ここは長いこと空き家だったのだ。

山賊などの無法者が根城にしてもおかしくない。

銃を取り出し部屋に探查魔法をかけ中の生命反応を確かめる。

どうやら生物はいるようだが少々反応が小さい。

銃をしまい静かにドアを開ける。

ワッ!

ワッ!

ニャー!

ミャー!

中には犬と猫が二匹ずつ。

よく見ると一匹の猫はまだ子供で怪我をしていた。それを庇うかのように犬が立ちはだかっている。

(犬と猫が仲良くしているのは珍しいな……)

これでは掃除が出来ないので猫の怪我を治すことにした。

「ケアル！」

見た感じだいたいしたことなさそうだし軽い回復魔法で十分だな。

子猫の怪我がふさがっていく。

ものの十秒もしないうちに傷が塞がる。

子猫は立ちあがって竜也の足をちょこちょこ駆け回る。

どうやら俺が悪い人物ではないと判断してみたようだ。

他にもこっちに少々警戒しながら近寄る。

「ほら、こい。」

しゃがみ込んで手招きする。

竜也は動物好きで元の世界では野良たちには秘密で餌をやっていたこともあった。

そのことで完全に警戒を失くし駆け寄って来る。

(さてこいつらどうしようか?)

別にここで住まわしても構わないのだが仕事が多くなるのは得策ではない。

まだまだこの世界の知識が足りない。

色々調べたいことがあるので長時間家を空けることはできない。

しかし、餌や外に出ないかを監視しなければならない。
どうしたものかと考える。
そこであることを思いつく。

「・・・始めてやるけど大丈夫だよな。」

掃除をいったん中止してホールに動物たちを誘導する。

（さて、やりますか。）

想像具現化である魔法陣を想像する。

すると動物たちに一匹ずつ足元に同じものが現われる。
やがて全身を光に包まれて動物たちは人の形になった。
術式は成功した。

使ったのは「擬人化の魔法」。
全員ちゃんとした人になった。
しかし、ここで問題が。

「ブツ!!!」

素っ裸だったのだ!
考えてみれば当然のことだった。
彼らは元々動物。
身にまとっているものは無い。
しかも、全員女子だった!!!

「わー!人間になっている!?!」

「今のは一体?」

「うーん？何かスースーする。」

「何よこれ!？」
四者四様。

「と、とりあえず服を着てくれ!!」

あの後。

俺が服を作って渡したけど服の着方を知らなかったため、目隠しして服を着せた。

ちなみに目隠しでも着替えさせることが出来たのは心眼を使ったからである。

服は全部同じなので着方を覚えてもらって自分たちで着てもらった。館の掃除より疲れた。

それで今は俺を含めて全員がホールにいる。

「あー、うん。とりあえず自己紹介しよう。俺は本条竜也。竜也って呼んでくれ。」

さっきのこともあり目が合わせられない。

「私たちに名前は無い。」

私も私もと声を上げる。
のっけからつまずいてしまった。

「ねーねー、竜もお兄ちゃん。さっき一体何したの？」
竜もお兄ちゃんだと！？イカン。何か気が遠くなる！

「さっきのは魔法だよ。君達を人間の姿と同じにするね。」
何とか根性で耐え。質問に答える。

「しかし、何故そんなことをした？」
何か威厳を感じる声だな。リーダーみたいだ。

「皆に聞きたいことがあつてね。」

「あら、何かしら？」
一番グラマーな人が聞いてくる。

「うん。僕の使い魔にならないかな？」

「何よそのツカイマつて？」
気が強そうな娘が聞き返してきた。

「使い魔っていうのは……。」
懇切丁寧に教える。

「ふむ。簡単にいえば臣下みたいなものか？」

「まあ、そんな感じ。」

皆真剣に考えている。

「ちゃんと三食つくし、服とか必要な物は全部買っし。」
「ごぞといつとときにアピールしまくる。」

「・・・ならば頼もうか。」

「私も。」

「あたしも。」

「しょ、しょうがないわね。だったら私も・・・。」

なんか一人ツンデレがいたような・・・。
くだらないことを考えながら、「契約の魔法陣」出して皆と契約した。

その時に名前を付けてあげた。

白髪の幼い女の子には「月光」。

元々は子猫だったみたいだから一番小さい。

見た目十四歳。

茶髪の凛々しい娘には「ティンダロス」

元犬で前までは皆をまとめていたみたいだ。

紅髪のグラマーな女性は「不知火」

元猫で中々頭がいい。

最後は俺と同じくらいの年齢で同じ黒髪の「ケルベロス」
元犬で直情型だがいつも前に出て皆を守っていたらしい。

「皆これからよろしくな。」

「「「はい、よろしくお願いします。ご主人様！」」」

最後の一言で俺のライフは0になった。

第十六話 思いついたら即行動って結構危ない（後書き）

ここで使い魔登場。

長かった。

この娘達を出すには結構苦労がありました。

使用人的な人を出そうにもただの人ではいけません。

何か人には無いもの。

人とは若干違う考えの人とかしか竜也君の仲間になりません。

話は変わりますが、今回の内容は結構強引なところが見受けられませんがスルーしてくれると幸いです。

それではまたの機会に。

二十万突破記念(前書き)

PV二十万

ユニーク三万

二十万突破記念

竜「どうも皆さん竜也です。」

S「。。。。。」

竜「あれ？おい作者？」

S「。。。。。」

竜「ああそっか。あまりの執筆の時間のなさに絶望してたんだっけ？」

S「。。。。。」

竜「って、今日はお前抜きじゃ話が進みづらいだろ！さっさと起きろ！！」

ガスッ！！ドスッ！！（蹴る音）

S「ガフ。。。。。」（チーン）

竜「あ。やばい力入れすぎた。」

竜「しょうがない。今回は俺だけで頑張るか。じゃあ紹介を始める前に、こいつをごみに出して。。。。。」

ポイ！

竜「よし、これで世界は平和になった？」

S「ふー、やっと再起動が・・・っていきなりゴミ収集車の中!? ちょ、出してくれえええええ!!」

ブーン（収集車が彼方に走り去る音）

竜「なんか聞こえたかもしれないけど気にしないでね。今回は紹介する場所に行きます。」

移動中

竜「着きました。ここが俺の今住んでいる国です。」

マルベリア国

大きさは少し小さく特色等は無弱小国。

だが、この国は豊かである。

政治形態は王制で今は善政。

竜「これって別に移動しなくてもよかったんじゃ・・・まいつか。それじゃ次に・・・って何もない!?あの駄作者め!ここ一つの紹介で終わらせようとしたな!後でしめる。」

レ「あ、リユーヤさ・・・。」

竜「ん?今レイスの声が聞こえたんだが、大工さんだけだな。レイスがいればちよどよかつただけ。いないならしょうがない、それでは次。俺の家に行きます。」

移動中

竜「いつ見ても大きい屋敷だな。外観はゼ〇魔のルイズの屋敷に似ています。」

竜也の家

「妖精の園」

豪商の屋敷だったが長年放置されボロボロに。

竜也がりホームシートな物件に早変わり。

竜「ほんと、最初はひどかったぜ。俺じゃなかったえらい時間かかっただろうな。」

ガチャ

ティン「おや？ご主人様、お帰りでしたか。」

竜「ちょうどいい。みんないる？」

ティン「はい、みな今休憩中です。呼びましようか？」

竜「うん。頼む。」

ティン「わかりました。」

時がほんの少し流れて

ケル「もう！休んでいるのに！」

不「まあ、良いじゃない。やることもなくて暇だーって叫んでったのは誰だったかしら？」

ケル「しゃ、しゃべるなよ!!」

月「それでご主人様！。今日はどうしたんですか？」

竜「うん、今のうちにみんなを紹介しようと思って。」

月光

白い髪をしている元猫。

見た目十四歳。

魔法使いタイプ。

使える魔法は回復系と補助系、召喚。

召喚、今のところ不明

特性、「テレパス念話」、フォルセック「予測」。

テレパス念話：遠いところにいる相手に会話ができる。

フォルセック予測：筋肉の動き、呼吸音、目線で相手がどう動くか高速で判断する。

ティンダロス

茶髪の凛々しい娘。

元犬でリーダー。

ケルベロスと同じ戦士タイプだがすばやさが高い割に攻撃力、防御力は微妙。

格闘を主体にした軽い武器を使う戦士で軽快な動きで闘う。

魔法は妨害系が主で攪乱戦を主体。

特性、「見切り」、「隠密行動」、「状況把握」等。

見切り：相手の攻撃を高確率で避けることができる。

隠密行動：移動音、気配などを消すことができる。

状況把握：少ない情報から状況を把握することができる。

不知火

元猫で中々頭がいい。

紅髪のグラマーな女性。

魔法使いタイプ。

知力と魔法攻撃力・防御力は一番高い。

魔法は攻撃系全般使える。

特性、「詠唱時間短縮」、「魅了」。

詠唱時間短縮：詠唱を短くする。

魅了：相手を虜にし一定の間行動を止める。

ケルベロス

竜也と同じくらいの年齢で同じ黒髪。

元犬で直情型だがいつも前に出て皆を守る存在。

完全な戦士タイプ。

攻撃力や防御力は高いがすばやさがいまいち。

重戦士タイプ。

使える魔法は自分の身体能力を上げるもの。

いくつか段階あり。

技：無し。

特性、「敵注目」、「一撃必中」等があった。

敵注目：敵の攻撃が集中する。

一撃必中：必ず当たる。

不「あらあら、私たちの情報が丸裸ね。」

竜「ブツ！そんな意味深なこと言うな！？ただの紹介だろ！」

ティン「ご主人様……。」

ケル「あんた最低。」

月「ご主人様のエッチー。」

竜「ぐす。」

このあと竜也は丸一日布団をかぶっていたそうなの

ところ変わって

S「誰かー！臭いよー暗いよー！！！」

さらに変わって

レ「わ、私ってそんなに影が薄い・・・？」

別の意味で精神にダメージが入った人がいたそうなの。

第十七話 チートに惹かれる者はチートになる(前書き)

記念の話と少々かぶっているところがありますが気にしないでください。

第十七話 チートに惹かれる者はチートになる

その後は皆で残りを掃除した。

なれない体で色々失敗していたみたいだが何とかなつたみたいだ。

終わった後、屋敷に改造（魔が付く）した。

屋敷の外壁をオルコンで錬成したり、敷地全域に神聖結界を張ったりして万が一のために備えた。

家の中にそれぞれ武器やトラップを隠したりもした。

ちよつとした忍者屋敷だ。

さらにガス、水道、電気のライフラインも充実させた。

現代とほぼ変わらない。

「竜也様、お茶のお代わりはいかがですか？」

十人が十人美青年と答える黒髪黒目の執事が優雅に聞いてきた。

「いや、もういいや。」

「畏まりました。」

凄いな。まだ、生まれたばかりなのに。

さて、こいつが誰なのか説明しないとな。

こいつは屋敷を管理しやすいように家に憑いている精霊だ。名前はセレス。

普段は人に顕現して執事をしているが、緊急時には家に戻り侵入者や迎撃している。

まあ、人の状態でもオルコン製の全身甲冑で戦えるが。

「俺、誰に言っただろ？」

「？いかがいたしましたか？」

「何でもない・・・。」
「やばい。何か電波的な物が・・・。」

とりあえず屋敷の改造は一応終わった。
まだ、物足りない感じがするが、それはおいおい付け足していけばいいだろう。

コーヒーを飲み終えた後は風呂に入り汗を流しに向かった。

- - - - - side セレス - - -

最初はただただ驚きました。

私が精霊として生み出されたのもありますが、それを人のみで作りに出すことが一番驚きました。

しかし、話を聞いて納得しました。

まさか、神が世界を超えさせたとは。

「不運なんだか、幸運なんだか分からない。」とは竜也様談ですが。

「それは本人が決めるでしょうね。」

小さく頬笑み、夕食の準備を始めるセレス。

(今夜は竜也様に教えていただいたハンバーグを作りましょう。)

献立を決めて調理に取り掛かる。

竜也が作った調理器具や道具は魔法の応用と現代の物を使っている。そのため料理の便利さは現代より遙かに便利なのだ。今は、セレス一人が全員分作っているがティンダロス達に料理を教え、後は彼らに任せることにしてある。今まで野良として生きてきた彼女らに楽しく生きてほしいと願う。

「・・・さて、出来ましたね。竜也様をお呼びしますか。」

「わー！！おいしそう!？」

おや？どうやら月光さんが臭いをかぎつけて来たようですね。

「ちょうどよかった。月光さん、竜也様に夕食の用意が整ったと伝えてきて下さい。」

「うん！分かった!！」

厨房から出ていく彼女を見た後、食事を運んでいった。

- - - - - side out -

「は。良い湯だな。」

やっぱ日本人は風呂だよな!？」

竜也がいる場所はローマ帝国のお風呂場のような巨大な浴場で、装飾や彫刻がふんだんに使われている。

また改造により二十四時間いつでもお湯が出てくるようにしていた。しかもシャワーやサウナも付いている。

おまけに外には直に掘った温泉を使って露天風呂も作っておいた。まさに至れり尽くせりである。

「さーて。サウナに行くか。」

腰にタオルを巻いてサウナに行こうと移動していた時。風呂場のドアが開いた。

「あつ、ご主人様！？こんなところにいた！」「ちよー！？おまー！？閉めて閉めて！！！」

「げ月光！どうしたんだ！？」

俺は急いで風呂に飛び込んだ。この間約0・5秒。自分でもびっくりだ。

「セレスがね。ごゆうしょくのような感じがととのったって言っていたよ。」

あれ？何か考えていた反応しないんですけど・・・。

「ご主人様早く来てね！」

扉を開けっ放しにして出て行っちゃった。

「何か慌てていたのがバカみたいだ。」

竜也はサウナを諦めて早々に風呂から上がった。

脱衣所で着替えて食堂に向かった。

もう、皆席に着いていた。

若干二名料理にくぎ付けで涎が垂れていた。

そんな光景に苦笑して竜也は席に着いた。

「「「「「いただきます!」「」「」「」

竜也はここに住む条件としていくつかの事項を出していた。

- 1 . 食事のときは全員そろって
 - 2 . お風呂は交代で
 - 3 . ティンダロス達の戦闘訓練は夜にする
 - 4 . あまり細かいことは気にしない
 - 5 . 研究しているときは絶対に入らない
- というものだ。

うん？

関係ないのが二つあるって？

まあ、気にするな後で説明するだろうし。

おれ、誰に向かって言ってるんだろう？

やばい。

本格的に電波はいつてんのかもしれない。

「あら？ご主事様、食べないのですか？」

不知火が心配そうな顔をして聞いてきた。

「いや、何でもない。うまそうだな。」

考えるのは後回しだ。今は飯でも食うか。

用意された料理に取り掛かる。

フォークやナイフだったため若干食いにくかったのは秘密だ。

さて。

夕食の後、彼女達を家の中でもっとも広い場所に案内した。

その部屋は元ダンスホールで装飾は何も施されていないが竜也は壁や柱をオルゴン製にした。

また、訓練内容によってSFにありがちな仮想訓練みたいなこともできる。

かなりリアルに。

「それじゃ、始めようか。まずはそれぞれの調べるからじっとしていてくれ。」

別にエロイ意味では無い。服を脱がすこともしないし触診もしない。

ライブラでステータスを見てタイプを見極める。

竜也の武道は満遍なく育てるよりも体格、身長、精神面を参考に戦闘スタイルを決めていく。

魔法で目に見えないことも分かるなので楽チンだ。

「よし、解析完了。」

まとめるとこんな感じだ。

ケルベロスは完全な戦士タイプ。

攻撃力や防御力は高いがすばやさがいまいちだ。

重戦士タイプか？

使える魔法は自分の身体能力を上げるものだけ。

いくつか段階があるみたいだ。

技はまだない。

これから覚えるだろう。

特性としては「敵注目」、「一撃必中」等があった。

名前の通りなので説明はいらぬ。

ティンダロスはケルベロスと同じ戦士タイプだがすばやさが高い割に攻撃力、防御力は微妙。

おそらく格闘を主体にした軽い武器を使う戦士で軽快な動きで闘う

のだろう。

魔法は妨害系が主で攪乱戦もできる。

特性は「見切り」、「隠密行動」、「状況把握」等。

これも説明不要。

不知火は魔法使いタイプ。

知力と魔法攻撃力・防御力は一番高い。

魔法は攻撃系全般使えるみたいだ。

特性は「詠唱時間短縮」、「魅了」。

最後は月光。

彼女も魔法使いタイプだが使える魔法は回復系と補助系。

あと召喚。

召喚が何なのか分からないが危険な物ではないと思う、多分。

特性は「念話」^{テレパス}、「予測」^{フォルセック}。

文句ないほどの支援キャラ。

彼女らの特技を伸ばせば足りない部分は十分補える。

「それじゃ、訓練内容を教えるぞ。」

第十七話 チートに惹かれる者はチートになる（後書き）

どうもsasurairiです。

またまた新キャラ登場です。

一応彼らのステータスは一般人に比べれば若干チートがあります。話の進み具合によってはパワーアップも考えております。

後々詳細なデータはまたの機会にします。

それでは、今回はこの辺で。

第十八話 分かっていても同じ過ちをしまっ(前書き)

一か月ぶりの投稿です。

明日レポート出さなきゃいけないのにやっけてしまいました。

第十八話 分かっていても同じ過ちをしてしまう

屋敷の生活も二週間たった。

最初は戸惑いと失敗のトルネードだったけど最近落ち着いてきてます。

今の俺の生活サイクルは、午前中にギルドに行くか錬成して作った金の人形等を商業ギルドに持って売るかだ。

資金面の流れに不審な点が表れないように、気を配っている。あまり、大きな買い物ができないが日常生活では問題ない。

まあ、ギルドでは単純に経験値稼ぎが出来るというのもあるが。午後の方はもっぱら図書館に行つて知識を溜めている。

そのおかげでこの世界の色々なことを知ることが出来た。歴史、魔法、モンスター図鑑、神話、植物図鑑 e t c

数えきれない程のたくさん読んだ。読んでいるうちに気付いたがこっつて首都だったんだ。

国の名前は「マルベリア」。

大きさは少し小さく特色等は無いどう見ても弱小国。

だが、それに反してこの国の豊かさは善政をしいているからである。難しい話は無しにしよう。

それで今日は何をしているかというところ。。。。

「暇だ。。。。」

そう暇人になっていた。

ギルドの方ではこれといった依頼が無く。人形の方も終わってしまったことが無くなってしまったのである。

ぶらぶら街を散策することも考えたが何か絶対に何かしらのトラブル

ルが起こる予感がする。

「そういえばこの先に公園があるんだよな。」
暇なので行きましょう。これ決定事項。

広さは前に行った広場の二倍ほど。

遊具は何もないがベンチはあったのでその上で昼寝をすることにした。

横になり目を瞑る。

少々眠気が来たときに遠くで誰かが怒鳴り散らしている声が聞こえた。

無視して寝ようとしたが一向におさまる気配がないので見に行くことにした。

「まったく。人の気も知らないで……。ん？」
ベンチの裏側に何かあるぞ？

手を伸ばして取ってみると緑色の財布が落っこちていた。

「誰のだろうか？」
まあ、後で何とかしよう。

財布をポケットに入れて騒ぎの元に急いだ。

入り口の付近で二人の男と一人のローブを被った人物がいた。

彼らのようだが、何かまた嫌な予感がする。

「何かあったのか？」
とりあえず話しかけてみる。

「それがあいつの財布が失くなっていてな。その前にぶつかった奴が怪しいって話を聞いているんだが。」
話を聞くて。怒鳴り散らすのかか？

「いい加減にしてほしい！私はもう行かせてもらっぞ！？」
って、ローブの人ここで逃亡するなよ。事態がややこしくなる。

「おい！まだ話は終わってねえぞ！！」
おいおい、何かやばいな。最早一色即発状態じゃん。

「まあ、もちせ・・・違った。落ち着け。」
ちよつと言い間違えそうになった。

「なんだよ！お前は！！今とりこんでんだ。後にしろ！！」

「そう言うなって。落とした財布ってのはどんなのだ？」

「緑色の財布だよ。ちゃんと閉まっていたのにいつの間にか失くなっていたんだよ！」

そう言ってローブの方を睨む。
竜也はさっき拾った財布を出す。

「もしかしてこれのことか？」

「あ！な、何でお前が持つてるんだよ!？」
そこで拾ったことを伝える。

「そ、そうだったのか。すまねえ。」
ローブの人に謝る。

「いや、気にしないでくれ。」

「すまないな、兄さん。」
こっちにも謝ってきた。

「もう、落とすなよ。」
二人は手を振りながら歩いて行った。

「やれやれ、とんだ目にあつたな。．．．ところでその少年。
うん？誰のことだ？」

「その君だよ。助かった正直まいつていたんだよ。」
俺のことか。まあ、日本人は幼く見えるって言われるし。

「気にしないでくれ。」

「厚かましいかもしれないが街の案内してくれないか？」
あれ？何か前にも同じようなことが．．．。

「いいよ。」
ぶっちやけ暇だし。

「それでは頼む。」
まさかな。おんなじようなことが早々有るはずがない。

と思っているぞ。

「お嬢様。お時間にごさいます。」
「ッ!? 全く気がつかなかった! いつの間にか背後に立たれていた。」

「むづ、もうそんな時間か。すまない少年、またいつか会おう。」
そう言うて後ろにいた人と一緒にどこかに行ってしまった。

(台風みたいな人だったな・・・。)

しかし、さっきのことといい今回のことといい俺にフラグ立ち過ぎじゃないかな?

俺、そんなことした覚えないんだが。
まあいいや。

でもこのままいくと、そのうちに森の中で美少女を助けたりとか闘技場で闘って優勝とかそういう展開がありそう。

元の世界でもそれなりにフラグがたっていたがこの世界はさらに多い。

まるでギャルゲーみたいに。

「そういえばこの間の人は一体どこの誰だったんだろう?」
さっきの人はって? 彼女は何と言うかすぐに別れたのでそんなに気にならない。

そこで時間がちょうど昼頃になっていることに気づいて帰ることにした。

「ただいま。」
でかい扉を開けて家に入る。

「お帰りなさいませ。竜也様。」

「お腹減った。ご飯出来ている？」
その足はもう食堂に向いている

「はい。皆さまもうお待ちです。」
何というか皆食欲大魔神だな。

食堂に入り食事をした後今日の予定を聞いた。
セレス以外は外に行つて買い出しをするみたいだ。
空想具現化や錬金術で生産は出来るがそれが出来るのは生物以外の
物。

つまり食用となる物の生産は出来ない。
卵、食肉、穀物、野菜、果物。

これらは全て生物から生産されるのでこれも生産できない。
しかし、それ以外の。
例えば、リンや窒素等と言った化学肥料は生産が可能なのでこちら
で栽培したりすることは出来る。

(まあ、俺が作り出した空間で土、水、空気を生成すれば場所の問題はクリアできるし定期的に繁殖と収穫を繰り返せば自給自足は出来るだろうが。問題はこの世界の農業を全く知らないことだよな。)

今まで武術のことばかりやらされたのでまともな農業の知識さえない。

精々小学校でチュウリップを育てたことがある位だ。

「そこら辺は図書館の知識と本場の人のやり方を見なきゃ始まらないだろう。」

食事を食べ終わって部屋でくつろいでいたがそろそろ図書館に行く時間なので立ち上がり支度を始めた。

第十八話 分かっていても同じ過ちをしてしまう（後書き）

またまた話がグダグダな感じになってしまいました。

最近色々ところで詰まっただけです。

話の大筋しか完成していないのが原因なのでしょう。

まあ、それでも何とか進んでいるので問題ないんではないかと。

次回はちよつと残酷シーンが出るかもしれません。

あと竜也の本気が・・・。

第十九話 世の中には綺麗な物があれば汚い物もある

屋敷で生活を始めてから早一ヶ月。

途中これといったトラブルもなく平和に過ごしていた。

「それじゃ、行ってくるよ。」

馬に跨りレイス達に留守を頼むように伝える。

実は今日から三日間ギルドの仕事で村の護衛に着くことになった。

他に高額の依頼が無くほっとけなくて受けることにした。

その村は最近近くにやってきた山賊に警戒して国のお偉いさんに報告したらしいが応援が少し遅れるらしい。

そのため臨時に雇うことにしたらしい。

本当ならケルベロス達も連れて行きたかったのだが。

まだ実践に出すのは早いので今回は家で待機だ。

レイス達に手を振りながら目的地に進む。

街から外れているので結構かかる。

「今回は護衛だもんな。今までとは違うやり方が必要だな。」

俺はどつちかと言うと、守るより攻めるタイプ。なので周りに目を向けなければならぬ。

「それに、あまり人外の力を出すわけにはいかないしね。」

これも要注意の一つだ。

今までは目撃者が少なかったのであまり気にはしていなかったが。

今回は何十人と竜也の戦いを見せるので慎重に闘う必要がある、のだが。

「まー、魔法でいいよな。」

あまり深く考えていないようだ。

「しかし、以外と成功するもんだな。」
乗っている馬に視線を向ける。

この馬は普通の馬では無い。
式神なのである。

竜也の神力で作っているので消えろと念じるか一定以上のダメージを負うと元の紙に戻るようになっていく。

疲れ知らずで主人に忠実、しかも意思の疎通もできるので偵察にも出せる。

もし、お偉いさんが聞いたなら何としてでも手に入れるだろう。
それほどの物なのである。

「他にも色々作ったからな。機密を守るために特殊な守りが必要だな……。」

そう。

式神以外にも危ないものがある。

それはこの間作ったもの。

「生産の壺」である。

この壺は増やしたいものを壺に入れると一晩でいっぱいになるという消費社会の日本からは涎唾の対象になる品物だ。

これでお金を増やしたり、貴金属、肥料の生産を行っている。
他にも武器や防具など世間に出まわったら大変なものがゴロゴロある。

「まあ、それは警護しながら考えればいいか。」
他人から見ればふざけているとしか思えないよな。

そんなことを考えながら進んでいると前方に黒い煙が上がっていた。
しかも一つじゃない。
見えるだけでも7つ見える。

(火災か?でもあの方角は……)

嫌な予感しかない。

竜也は村に急いだ。

「何だよ……。これ。」
まるで戦闘の跡だよ。

いくつもの家が全焼したみたいで崩れ落ちている。
殆ど鎮火しているが、まだ燻っているところがある。
近くに人が倒れている。
竜也は慌てて駆け寄った。

「おい!しっかりしろ!?!」
だが。

「……。」

もう死んでいた。だが、焼け死んだのが直接の原因ではない。背中に斬られた跡があった。

そこまで確認したときもう一人。

小さな女の子が手を伸ばして死んでいた。伸ばした先には焼け焦げた人形があった。

「おい、こんなところにまだいたぜ。」

「変な奴だな、全身鎧何て。」

何処からか身なりが小汚い奴らが出てきた。

容姿は様々だが共通しているのは全員剣を持っていた。抜き身で何本かには血が付いていた。

「……貴様らが。」

「あん？」

「貴様らがやったのか？」

「げははは！ああ、ここの村は中々いい獲物が沢山あったからな！」

「まあ兄ちゃんの鎧もいいな、置いてつてくれよ。」

何の罪もない小さな女の子まで殺した。

平凡な村に自分の欲を満たすためだけに襲った。

奪い、犯し、焼き払い、殺した。

竜也は自分の中の血が急激に熱くなる感覚を覚えた。

マグマのようにグツグツと。

血が沸騰する位に。

竜也は・・・。

「ウオオオオオオオツツ！！！！」

吠えた。

一瞬で身体能力を限界まで上げ、麒麟を取り出し奴らを斬り裂いた。山賊達は何が起こったか分からないまま死んだ。比較的無事な小屋から女性の悲鳴が聞こえた。扉を蹴破る。

ドカンッ！

そこには全裸の若い女性が山賊達に凌辱されていた。

手近にいた山賊の首を刎ねてUSPを取り出し奥の奴を射殺する。

バン！バン！バン！バン！

眉間に撃ちこまれ、倒れる。

一人の山賊が飛びかかって来るがけりて倒す。

ボギッ！

首が折れて死んだ。

最後の一人はやっと事態に気づいたのかにげだそうとした。しかし、扉は俺が入ってきたところの一つしかない。

「ひっ！！おおお願いだ助けてくれ！！」
その傲慢すぎる物言いが無性に腹立たしい。

「そういつて助けを求めた人にお前は何をした？」

男は顔面を蒼白にさせ横をすり抜けて逃げたが……。

バン！

後ろから銃弾を撃ち込まれ死んだ。

溜息もつかずに女の方による。

暴力をふるわれた者や足の臍を折られた者。

一人として無傷な者がいない。

そのことにイライラしながら話しかけた。

「他に生き残りはいないか？」

「あ、あの。あなた様は？」

体を隠しながら聞いてくる。他の女性も同じだ。

「俺はギルドからの依頼でこの村の警護をしに来たものだ。」

「……。もう、遅いわよ。」

ポロポロの女性はこっちを睨みつけながら言い放った。

他の女性からも憎しみの混じった視線を向けられる。

「あんたがもう少し早く来てくれれば！この村は襲われなかった！

私の母も旦那も息子も殺されることは無かった！！！」

女の悲痛な叫びが響く。

ここで竜也を責めるのは間違っている。

命を助けてもらったのだから感謝こそすれ罵られることは無い。

だが、この襲撃で皆何かしら大事なものを失った。
そのせいで感情が爆発したのだ。

「……。すまない。」

竜也には謝ることしかできなかった。

「す、すみません！助けていただいたのに……。」

先ほどの女性が謝って来る。

「他に二人。荷物運びをさせられているはずです。」

「そうか。山賊の正確な人数は分かるか？」

「お、おそらく二十人程だと思われませす。」

さっき倒したのを合わせれば十七人。
残り三人。

「ここに隠れている。すぐに終わらせる。」

そう言うと小屋から飛び出し、探査魔術を使い反応を探る。
反応を見つけると隼のように向かった。

第十九話 世の中には綺麗な物があれば汚い物もある（後書き）

はい、今回は暗い話になっております。

この話は書いていて気が重くなりました。

やっぱりグダグダな話や楽しいことを書いているほうがいいです。

第二十話 後悔しても遅い話（前書き）

今年最後の投稿です。

それではみなさん良いお年を。

第二十話 後悔しても遅い話

反応があつた場所は村のもう一つの出口の方だった。

そこには若い男性二人が馬車に重そうな荷物を運んでいた。

馬車は全部で三台。

内二台に山賊が乗っていた。

(もう一人の姿が見えないな……。様子を見よう。)

もう二往復ほど荷物を運びこんだころもう一人出てきた。

竜也は鳳凰と麒麟を二人に投げつけた。

ヒュンツ！ヒュンツ！

二本は一つが首に。

もう一つが頭に刺さり即死だった。

(残り一人！！)

しかし、ここで最後の一人が竜也に気付き馬車を走らせ逃げてしまった。

直ぐに追いたいたいところだがまずは二人の男性に話をしなければならぬ。

「大丈夫か？」

片方の男に話しかける。もう一人は疲れているのか座っている。

「あ、あんたは？」

「俺はこの村の警護に付くはずだった者だ。」

「そうか……。だがそれももう終わりだ。金目の物は全部あいつが持って行った。」

「……取り返してこようか？」

「何？」

「急げばまだ追いつける。取り返してくるか？」

「頼む。ついでにあいつを……！」

「分かっている。あっちの小屋に女達がいる、少しの間見ていてやってくれ。」

「分かった。気を付けてな。」

突き刺さった鳳凰と麒麟を抜き、式神の馬を呼びそれに乗って追跡を開始する。

時間にして数分。

いや、あるいは数十秒しかたっていないなかったかもしれない。

もっともそんなこと今の竜也には全く気にも留めていないが。

「あれだな・・・！」

追い抜きざまに手綱をぶった切った。

手綱が切れたことに驚いたのかいきなり追い抜かれたことに驚いたのかは知らないが馬は転倒した。

山賊は転倒の拍子に森に投げ出された。

俺は馬から降りて森に入った。

山賊は投げ出された勢いで木にでもぶつかっただのか立ち上がれなさそうだった。

「ヒッ！！」

どうやらこっちに気付いたようだ。

「ま、待て！俺と組まねえか！？」

何か言っている。凄工耳障りだわ・・・。

「お前ほどの腕と俺の統率力が合わされば無敵だ！報酬もたんまりやるぞ！！」

必死に俺の気を引こうとする。酷く醜く見える。

「そ、それに高価な武器や防具を手に入れたら・・・。」

「・・・うるせえよ。」

「！！！！」

「そんな物はどうでもいい。お前らは人としてやっっちゃいけねえことをしたんだ！」

「許してくれっ！もうこんなことはしねえ！？本当だ！！」
もう聞きたくもない。

キンッ！

「ガアッ！」

金属同士がこすれ合うような音と共に喚いていた男の喉を斬った。
血が止めどなく溢れ出てくる

これはもう重症だ。

助かるはずが無い。

しかし、それでもここから逃げようと斬られた喉を押さえながら必死に逃げようとする。

俺は近づき心臓めがけて刀を突き刺す。

ドスッ！

二度三度痙攣して動かなくなった。

静寂が場を支配した。

得物を抜く

(これで全部か……)

ポタン・・・ポタン・・・。

何処からか水たまりに水滴が落ちる音がする。
いや。

水滴ではない。

自分の刀から斬った男の血が落ちて血の溜まった場所に落ちている。
自分の体から急速に熱が引いていく感じがした。

死体を見る。

血を流すだけの

動くことのない

タダノニクノカタマリ・・・

「うっ！！」

刀を落とし兜を乱暴に脱ぎ捨て、近くの木^{ハルム}の根もとに盛大にぶちまけた。

「ぐっ！！・・・ゲホッ！」

昼に食べた物が吐きもとどされる。

同時に今まで殺してきた賊を思い出し、また吐く。

暫く吐いて胃の中に何も無くなってから竜也は寝転がった。

空は曇天だった。

今にも雨が降りそうな空模様だった

そんなことを思っていると本当に雨が降ってきた。

最初はポツポツとまばらに降っていたが、やがて小雨になった。

自分の顔に雨が当たる。

竜也は何も考えられずただ雨に当たっていた。

あれからやつと体を起こし、村に帰ってきた。ちゃんと兜を被り直し鳳凰を鞘に納めて戻ってきた。取られた物は全部馬車と一緒に運んできた。

「あ！お戻りになりましたか！？」
見るとさつき座っていた男が近寄ってきた。

「・・・取り返してきた。」

竜也の心はまだ沈んだままだった。元々彼は山での修業経験があるのだ。動物を捕まえてそれを調理した経験もある。しかし、殺したのは野生動物のみ。喧嘩の時も相手に怪我を負わせたことはあっても殺したことは無かったのだ。

「ありがとうございます！」
九十度に腰を曲げて頭を下げる。

「いや・・・。」
沈んだ気持ちを押し殺し答える。

「あの、もう一つ私たちの頼みごとを聞いてもらえませんか？」
怖々と聞いてくる。

「何だ？」

「はい。生き残った村人は全員街に移動しようかと思い、その道中の護衛を頼みたいのですが・・・。」

正直言うと、そんな頼みごと断って早く家に帰りたと思った。だが、生来の性分で断ることはしない。

「……分かった。」

「何かから何まで感謝してもしきれません！」

「それで、歩いて行くのか？」

「いえ、無事馬車を使って移動する予定です。怪我をして歩けない人もいます。」

「それなら、俺が直してやろうか？」

回復魔術は使えるから先天的なものでなければ大丈夫だろう。

「……え？治療もして下さるのですか！？」

これにとてつもなく驚く青年。

実はこの世界。

相手を殺傷系魔術は普及しているが、回復などの治癒系の魔術はあまり伝わっていない。

殺傷系の場合は本人の魔力と魔術を使える才能が必要だ。

これでもかなり絞られる。

回復系はこれらの中に含まれていて治癒系の才能が不可欠なのだ。

さらに言えばその才能があっても高い才能でなければ効果は極めて低くなる。

だからこの世界では回復魔術を使える人間は極わずかしかない。その大多数が魔法都市と呼ばれるところで働いているがそんなこと竜也が知るわけが無い。

「けが人を一か所に集めてくれ。その方がやりやすい。」

「は、はい！分かりました！？ここに集まっているはずですよ。」

青年が歩き出す方に付いていく。

人を助けるために人を殺した。

そんな矛盾が彼の中でグルグル回りながら。

第二十話 後悔しても遅い話（後書き）

ダークです。

とてつもなくダークです。

今回は竜也が始めて人を殺してしまったという葛藤です。

こういう異世界系では無くてはならない話です。（一部例外はありますが）

今まで多くの喧嘩でならしてきた彼ですが。

実際の戦場とわけが違う。

ということも書きたかったんです。

それでは今日はこの辺で。

次はその後です。

投稿はなるべく早めにします。

第二十一話 話して楽になることもある(前書き)

新年明けましておめでとございませう。

今年初の投稿です。

第二十一話 話して楽になることもある

今俺は村の人たちと街に向けて移動している。

馬車、三台を使いゆっくりと。

あれから全くと言っていいほどしゃべっていない。

最初の方は皆それなりに明るく振舞っていたんだが長く続かなかつた。

「そろそろ見えてくるはずだ。」

視界に見なれた街が見えてきた。

門から街に入りそこで別れる。

「助かりました。これが依頼料です。」

手渡された革袋には破格とまではいかないがそれなりの額が入っていた。

「いや、村の警護なら不達成だし護衛の料金にしては多すぎないか？」

「治療費も入っています。それに山賊の討伐の分も入れています。」

「しかし、こんなには受け取れない。これからは結構必要になるだろっ？」

あえて何とまでは言わない。

「村から持ってきた分がまだありますから大丈夫です。それにこれ

は私たちからの感謝の気持ちです。」

「そうか。では受け取ろう。」

「はい、それでは。」

「ああ。」

馬車で街中に入って行く。

何も言わずにただ黙って見送る竜也。

やがて見えなくなり、歩き出す。

当てもなく。

フラフラと。

しばらく何も考えずに歩いていたが気が付くとそこはギルドの前だった。

報告はしておこうと中に入った。

「あれ？リユーマ、何でここに？」

受付をしていたリリスがこちらに気が付いて声をかけてきた。

竜也は今まであったことを話す。

「そうだったんだ。がんばって生きていてほしいね、その人たち・・・」

「。。。」

「そうだね・・・。」

「ああそうだった。一応依頼は不達成ってことになるけど……。」

「構わないよ。罰金とかは？」

「本来なら貰うんだけど事情が事情だし今回は特別にいらさないわ。」

「……いいのか？」

「うん。今回は警護に付く前だから。」

「……そうか。」

俺はそう答えてギルドを出た。何でもいいから罰してほしかったって言うのは逃げてるのかな？

外に出ると真っ直ぐ家に帰った。

式神を戻し中に入る。

「あら、ご主人様じゃない。どうかしたの？」

ケル（ケルベロスの略称）が玄関ホールを掃除していた。

「村に行く前に襲われてな。不達成になった。」

説明すればするほど気分が重くなる。

「だから今日はもう寝る。夕食はいらなんて伝えてくれ。」

「え？でも……。」

自分の部屋に向かう俺の後ろでケルが何か言っていたような気がする

る。

自分の部屋に着くとすぐベットに倒れこみ寝入った。竜也は自問自答のスパイラルに精神的に参っていた。結局その日は夕食も取らずずっと眠っていた。

翌日になり誰にも伝えることなく屋敷を出た。

ただ何となくフラフラと街を歩いている。

最初は人もまばらだった通りは時間が経つにつれて人が増えてきた。当てもなくさ迷ったが前に来た広場に着いてベンチに腰掛けた。空を見上げる。

晴天とも曇りともいえない微妙な天気。

「こんなところで何をしているんですか？」

視線を下に向けるとそこには・・・

「レイス・・・？」

「うれしいです。覚えていてくれたんですね。」

この前見たときと同じ格好で目の前にいた。

「今日は大丈夫なのか？」

「はい、しっかりと許可は頂いていますから。隣良いですか？」

ああ、と言ってレイスが隣に座る。
暫く無言であったがレイスが口を開いた。

「あの、大丈夫ですか？何だか元気が無いようですが……。」

「……。何でもない大丈夫。」

「本当に？」

そう言われて口を閉じてしまう竜也。

「もしよろしかったら話して下さい。」

「……。」

本来なら絶対に話さなかっただろうが参っていた竜也は淡々と話した。

依頼で行った村が賊に襲われていたこと。

その盗賊を皆殺しにしたこと。

助けを求めた盗賊もいたこと。

そして、その時始めて人を殺したことを。

全てを話終えた竜也は彼女がどう思っているか気になった。

人を殺したことに恐怖するのか。

村を救えなかったことに落胆をするのか。

はたまたこんなに落胆している自分を見て飽きられているのか。

彼女の表情を見る。

その表情はまじめそのものだった。

「それで、あなたはどうしたいんですか？」

「どつて……。」

「村を救えなかったことに対する贖罪が欲しいのですか？それとも人を殺してしまったことを許して欲しいのですか？」

「両方ともだな。」

「私は両方ともあなたが罪の意識を感じる必要ないと思います。」

「だけど……！」

「あなたは確かに強いです。しかし、いくら強いといってもそれは個々にすぎません。全てを守るなど不可能です。」
冷静に返すレイスはどこか大人びた表情をしていた。

「人殺しは確かに罪です。しかし、あなたは村人を救うために戦ったんです。それにこう言つては悪いですがあなたが殺したのは全て盗賊、放つておいても害をなすだけの存在。いずれは討伐をされていたでしょう。」
続けて彼女はこう言う。

「悪人だからと割り切れないのは分かります。ですが、そのおかげで生き残った人たちがいることを忘れないでください。」

「生き残った人たち……。」

そう言った竜也の頭の中に彼らの顔が浮かんだ。
皆疲れていたが安堵していた顔。

その顔を一つ一つ思い出すたに罪の意識が軽くなった。

だが、

「でも、俺はまた殺してしまうかもしれない。今度は罪人じゃないかもしれない。」

「では、あなたは見て見ぬふりをしますか？」

「それは……。」

「私は助けます。」

彼女の目は決意のこもった瞳であった。

「もし、そこで見捨ててしまったら私は後で後悔します。」

「だから、私は助けます。」

後悔したくない。

それが、彼女が行動する理由。

「……そうだよな。」

俺の中で答えが見つかったような気がした。

「何もしないで後悔する方が辛いもんな。」

それがどんな形かは分からない。

「はい！」

今まで最低だった気分がかなり払しょくされた。

まだ、完璧に立ち直ったわけではないが。

いつもの調子に戻ってきた。

「ありがとう、レイス。」
俺は心の底から礼を言う。

「いえ、どういたしまして。」

光の関係か、少し赤くなっているようにも見える。

お互い笑い合う。
優しく。

「あ！」

突然声を上げるレイス。

「どうした？」

「そろそろ戻らなければならぬ時間なんです。」

「そうか。」

立ちあがって来た道に向くレイス。

「今度遊びに来てくれ。歓迎するよ。」

「はい。」

にっこり微笑んで帰って行く。

その後ろ姿を見送った後竜也は立ちあがり。

「俺も帰るか……。」

帰路に着く。

第二十二話 竜也の研究レポート？ + (前書き)

ストックが切れそうです。

第二十二話 竜也の研究レポート？+

村の事件から一週間たった。

実を言つとあれからずっと研究所にこもっていた。

え？

研究所何かいつ作ったかつて？

それは家を改造したときにちよこつと増築したのさ！

ちなみに地下にね。

やっぱ地下に作らないとね。

大きさは映画にもなった某ゾンビ研究所の十倍程だ。

研究室、薬品室、製作室、実験室、実地試験室その他様々な部屋を作った。

明らかに unnecessary な部屋もあるが。

・・・。

さて、本題に入ろう。

今回行った実験であることが分かった。

それは、

「オリジナルの物品や技、術はかなりランクダウンしてるんだよな。」

そう。

最初に例の銃を出したときにも思っていた程の威力は無かった。

その後ののかの有名なスペカの術も外国で残念な叫び声になったあの技もかなりの威力不足を感じた。

他にも有名な技を試してみたところ同じように威力がいまいちだった。

覚えている範囲で比較してみるとオリジナルの三〜四割程しかなかった。

原因は分からないが結果としてオリジナルの技は一部を除いて使えないことが分かった。
そう、一部は。

「ま、全回復技とか改造したやつとかは問題ないし。いつか。」

全回復技。

べ マなどといった場合は問題なく作用する。

「全」と付いているから関係ないのだろう。

あんまむつかしいことは分かんのです。

それと、ほんの少しでも改造した物は本来道理の性能を発揮した。

あんまむつかしい（以下ry

でもどうしてだろう？

『それは私が教えましょう！』

「……。」

イカンなここんとこずっと研究漬のせいかな女声の幻聴が。
今日はもう寝よう。

『って無視しないで！！お願いだから！？』

本格的にやばいかも。

医者に見せたらこう言われるだろう

「もう末期です。」

ってね

『キモツ！男が とかないわ〜』

・・・俺の幻聴だとしてもムカついてきた。

「うつせーな。幻聴なら幻聴らしいこと言ってる!?!」

『は。やつと話聞いてもらえたわ……。』
チツ! 反応しちまった。

『何か腹立つわね。』

「幻聴のくせに……。」

『幻聴じゃないよ。』
『皆同じことを言う。』

『いい加減認めなさいこれは幻聴じゃない。』

「じゃあ、お前は何なんだよ?」

「よくぞ聞いてくれた! 私は神だ!」
はいはい。ワロスワロス。

『ふ。笑っていられるのも今のうちよ。』
は? どういう……。』

話に夢中で足元を疎かにしていた。
突然何かに躓く。

「うつわっ!?!」

そのまま転んで後頭部を強打したところで俺の意識は途切れた。

「・・・うー。痛ててて・・・。つてあれ？痛くない？」

「そりゃそうよ。ここは私の世界よ？」

後ろから聞きなれた、いや聞きなれたくない声が聞こえてきた。ゆっくりと振り向くとそこには二十代前半の女が立っていた。

俺よりも少し背が高く、体型はスラッとしていてモデルっぽい。恰好は神官が着ているようなローブ。

少しほっそりして整った顔つき。

髪は腰まであるロング。

「どちら様？」

「だから神様よ。か・み・さ・ま！」

確認のためです。はい。

「それで俺どうなったんだ？」

「大丈夫。後頭部を強打して気を失っているよ。」
「まったくもって大丈夫じゃないんだが！？」

「今のあるたを殺すならこれを後二〜三十回ぶつけなきゃ。」
「怖えな！？」

「それで他に聞きたいことは？」

「俺を早く戻せ。」

流石にこの事態は事実であることが分かった。
なので直ぐに帰りたいのが本音。

「いいわよ？でも話が終わってからね。」

「話ね。」

さっさと聞いて帰ろう。

「それじゃ、まずは自己しょ」「いらんから早く本題に」「そう言わな
いで聞いてよ！」

ちょっと涙目になってこちらを見て来る。

「分かった分かった、三文字でな。」

「短ッ！！っていうか四文字以上の名前はどう紹介すれば！？」

「縮m「無理だつてば！！」「チッ。全部聞いてやるから早く言え。」

何かうーうー言っているが気にしない。

「ゴホンッ。私は異神二級神、アルナ・クレガラス・ロレント。アルナ様と呼びなさい。」

「ふーん。んでアルナ、異神って何だ？」

早速呼び捨て、タメ口で聞いてみると案の定怒り出した。

「ちょっと！神様に向かってタメ口とか聞いたことないんですけど！？」

「どうでもいいからさっさと質問に答えろ。」

どうしても、と言いながら地面にのの字を書いて落ち込んでいたが早めに復活して会話が進む。

「異神って言うのはね、異次元を管理してる神様のこと。」
何だ。要するに地獄の閻魔様みたいなもんか。

「違うわ。」
違うのか？

「まー、簡単に説明するとね。この世界には元々二種類の神がいるの。」
聞いたことが無いな。どう違うんだ？

「まず私たち異神。それと常神。常神の場合はあなた達が一般的に認識してる神様よ。」
それって、天照とかオーデインとかか？

「そうそう。でね、閻魔とかの地獄は特殊だから省くけど大体常神は自分の世界だけを管理するのよ。」
うーん。つまり支店みたいなものか？

「変な例えだけどそんな感じね。」

異神ってのは？

「世界の狭間。いわゆる次元を管理してるわ。」
へー。

「あーしょぼいって思ったでしょ！？」
そういうわけじゃないが。

「いい。常神と異神は管理してる範囲が段違いなんだから。」
そうなのか？

「分かりやすく言うなら川ね。」
川？

「川を思い浮かべなさい。」
いきなりだな。

竜也は言われた当理に川を思い浮かべる。
そんなに深くなく流れが速い典型的な日本の川だ。

「川に入っている小石が一つの世界、流れてる水が次元よ。」
って、無茶苦茶広いじゃん！

「そうなのよ！おかげで書類を片付けても片付けても際限なく出てくるのよ。おかげですーっと机にかじりついている状態なの。」
何処の場所でも仕事は溜まるんだな。

「ちなみに、君が会った死神は私の部下よ。」
マジか！？苦労してんだな。

「しかし、本当もー、参っちゃうわよね。あの子も、もう仕事始めてから5年経ったんだしもつと堂々と・・・。」

何か小声で言い始めたが何故か聞き取れない。

「まあ異神と常神の違いは分かった。それで、なんのようなんだ？」

「ああ、そうそう！あなたが漫画とかの技を使うと性能が落ちるって話！」

うっかり忘れてたよ、と言う。

正直に言って非常にウザい。

「それでね、簡単に説明すると・・・。」

アルナの話 요약すると。

オリジナルの技や術などはその100%を使えるが、他の人がそれを使うと1%位しか発揮できないらしい。

俺の場合、想像の具現化を使っているからいくらかまじみただが。しかし、それなら他の現実的なもの（格闘技の技とか）は作用しないのか尋ねてみたがそれは違うらしい。

その人によって性別、能力による限界値、さらには性格、血液型、体格などの細部まで一緒じゃないとこの効果は作用しないみたいだ。だが俺の方は能力のせいで完璧に同じになってしまうのでさっきの効果が表示されるということ。

「ちょっと残念だな。漫画の技とかド派手に使いたかったのに・・・。」

「まあ、少しでも違うようにすれば使えなくないこともないから。」

色々試してみたら?」

そうする、と竜也は答える。

「それじゃ、説明も終わつたしそろそろ「あっ!ちよつと待て!」?」
な、何よ?」

アルナの言葉をさえぎる竜也は悪戯を思いついたような顔をしていた。

「頼みたいことがあるんだが……。」

竜也があることを伝える。

「……を持ってきて欲しいんだけど、出来るか?」

「別にそれくらいなら大丈夫だけど。何でいまさら?」

「それはほら、俺もつどんな知識も取り込めるから。」

「分かったわ。場所はあなたの研究室でいいかしら?」

「ああ。」

「それじゃ、送るのは一日に十冊でいいわね。それじゃ今度こそ、
バイバイ。」

手を振るアルナが急速に離れていき俺の意識が覚醒した

「あ痛たたたたた！」

起きると一番に感じたのは頭痛だった。

後頭部に手を当てながら起き上がるが、そこでぬるっとした感覚があった。

何事かと思って手のひらを見ると。

「うおっ！？血まみれじゃん！！」

傷を治しながらアルナにはフルパワーの右をくれてやるうと誓った。

第二十二話 竜也の研究レポート? + (後書き)

今回は長めです。

マイリス、評価してくださった皆さん本当にありがとうございます。

意見・感想・質問もいつでも受け付けます。

気軽に書いてくださってかまいません。

次回はチートでとんでもないことをします。

第二十三話 竜也の研究レポート？（前書き）

今回は説明文が多いです。

第二十三話 竜也の研究レポート？

またまた研究室からお送りします。

今アルナから送られてきた本を参考にしながら俺はある物を作っている。

それは、

「おし。これで戦艦が出来たな。一応これで全部作ったかな？」

そう。

アルナから送られてきたものは、本は本でも軍事物。

それも兵器に関するものだった。

小火器や個人携行火器は作ったが、それでも限界があった。

そのため現代の陸上戦力の要、戦車。

音速さえ突破する戦闘機。

海の要塞と言われる戦艦。

陸海空の主戦力をそろえて対処しようと考えたのだ。

まあ、この他にも自走砲や対地攻撃ヘリコプター、潜水艦などその他様々な兵器を作り上げた。

ちなみに作った物は全部ゲームをベースに作った。

両方の良いところりをしたのである。

だが、このまま使うには致命的な欠点がある。

それは。

「元々複数の人員で運用するのが前提だったからな。」

どうすつか、と悩む。

そう、現代兵器は一人で使うことが出来なかったのである。

戦闘機などには一人用はあるが、戦車は2〜3人。戦艦に至っては数百人単位必要である。とても一人で使えない。

例え使えたとしてもその性能をフルには発揮できない。悩みながら本を見ていると。

「うん、何だこれ？」

その本は軍事ではなくプログラムに関する物だった。

「プログラム？あんま役には……。」

本を捲っていたがある個所に目が止まった。

AI。

いわゆる人工知能である。

ゲームなどで敵用の動きなどに使われている。竜也はそこに目を付けた。

「これを作れば個人でもどうにかなりそうだ。」

しかし、そこであることが頭をよぎった。

（単純な命令なら大丈夫そうだが、複雑な命令は無理そうだな……）

ゲームで使われるものはごく単純な物が多い。

複雑なものを作ればそれだけバグや誤判断が起きる。これではまだ駄目だ。

「他に何かないかな？」

しかし、残念ながら役に立ちそうな物は無かった。そこで、前に考えたある技を使うことにした。

「答えを要求する（アンサー・デマンド）」。

名前からしてかなりチート臭がするが、便利ではある。特に最善なことが何かを知るためには。さて、要求に応じた答えは意外なものだった。

「個人光学兵器の思念誘導装置の流用？」

頭に浮かんできた言葉をそのまま言うがピンとこない。

『詳しく見る』と念じてみるとようやくその答えの意味が分かった。つまりその装置を命令系統の絶対優先位置にし、自由に動かすということだった。

という訳で早速製作に掛った。

まず、最初にAIの製作。

これはプログラムに書き込むだけで終わった。

次に、思念誘導装置だ。

これは、前に作ったものを分解し探査魔法で見つけた（もちろん複製してストックを確保した）。

さらに神聖術の解析アナライザーを使って構造を把握する。

そこからまた「答えを要求する（アンサー・デマンド）」を使い改造する。

それで出来た機械を複製しておく。

後は搭載するだけだが、これがまた大変な作業になる。

合計で二十以上もある兵器を分解するのは骨が折れるのだ。

また、その兵器によって配置する場所が違っているのでかなり神経質になる。

こうして精神をすり減らしながら改造し実地テストを行い安全の確認をしてから永久に動けるようにしてようやく完成なのだ。そんな行為を二十回以上も繰り返せばいくらなんでも疲れてしまう。だから分けて行うことにした。

「陸海空のどれをやるう？」

近くにあるイスに座りながら考える。

問題はどれが臨機応変に対応出来るかだ。

陸が一番使うかもしれないが、海も近くにあるので対応はしづらい。では海の方がいいかと言っても今度は陸にとなる。

と言う訳で。

最初は航空兵器の改造に決まった。

まず戦闘機の改造に取り掛かることにしようと思われ、立ち上がり目的の場所に向かって歩き出す。

奥にある戦闘機は奇抜だった。

まずコックピットも含めた全体が装甲で覆われている。

さらに真っ赤な塗装であること。

極めつけは各所に様々なセンサーが埋め込まれているところである。

これは、コナミの某戦闘機ゲーのADF-01・FALKENという機体で機動性、スピード、攻撃能力、どれをとっても最高峰の戦闘機だ。

特殊兵装は対艦・対空・対地に使えるTLSと呼ばれる大型レーザー。

揮発性の高い燃料を広範囲に散布して大爆発させる燃料気化爆弾。

個人火器のミサイルと遠距離空対空ミサイルを錬成して一度ロックが外れても追尾し続ける最強の高機動型空対空ミサイル。

あとは普通のミサイルと機銃を搭載している。

普通なら特殊兵装は一つしか選べないのだが、ある特殊な物を使い弾数を無限にし全て搭載した。

ちなみにその特殊な物はある忍者系ゲームの巻物だ

余談だが彼はこれをゲームで使った結果、俗に言うヌルゲーになった。

動力は前々から作っていた魔力エンジンを使い航続距離をほぼ無制限にした。

この魔力エンジンは大気中の微力な魔力を吸収し増幅させタンクに送り込んでいる。

魔力の無い場所には補助動力源が二つ付いており一つは飛行用、もう一つはタンクに入れられる。

このタンクに入れる時にも増幅され満タンになる。

さらに、そのタンクから補助動力源に魔力が送られて、緊急用に備えられるので無限に循環させることに成功した。

他にもVTOL型（垂直離陸型）にしたり、レーダーに生体探知口ツクオンシステムを導入したり、果てには装甲をオルコンに改造したり、特性を使って精密部品などが絶対に壊れないようにするなど最早怪物と言ってもいい超戦略兵器が誕生した。

FALKENの改造が終わったらAWACSや軍用輸送機等の開発に移った。

一度熱中してしまうと中々抜け出せないのは彼の数少ない欠点だ。

元の世界では鍛錬以外の時間は全てゲームに費やしたこともあった位だ。

結局彼は一睡もせず改造に没頭し続けた。

第二十三話 竜也の研究レポート？（後書き）

兵器紹介

A D F - 0 1 ・ F A L K E N

最高速度マツ八十

装甲・オルコン合金

各所に光学カメラ・センサーを設置。

航続能力は魔力エンジンで動き、その魔力は大気から取り込んだり無限に循環させるので実質無限。

武装はM 6 1バルカン、近距離空対空ミサイル、T L S Ⅱ戦略レーザー、燃料気化爆弾、高機動型空対空ミサイルの5種類。

弾数は無限。

精密機器などは特性で壊れない

どう考えてもチートですね。

第二十四話 遅れてやって来る自己紹介

兵器開発が一段落して今は自分の訓練に精を出している。

いくら身体能力を高くしても反射神経がいい人などには直ぐに反撃される。

そのため今まで習ってきた古武術を反復練習している。

子供のころからやってきたことなのでそんなに苦痛には感じず、むしろ楽しく感じる。

やっぱり自分は武術家なんだな、と思いながら朝稽古が終わる。

ちなみに今まで、ランニング（屋敷五十周：約三十Km）、筋トレ（体中に水銀が入った箱をくつつけた：合計二百Kg）、突きや蹴り等（基本的な動作を三千回）である。
うん？

既に人間の身体能力を突破したって？

何を言ってるのやら。

こんなの親父の修業に比べたら・・・。

お、思い出しただけで寒気がする。

忘れよう。

話を戻すが今は昼を少し過ぎた時間帯。

いつもなら昼寝するか散歩するか訓練するか研究するかなんだが。

珍しいことが起こった。

それは俺が昼飯を食ってこれから何をしようかな？と考えていた時だった。

「失礼します。竜也様、お客様がいらしてます。」
と扉越しにセレスが言った。

「客？珍しいな。」

というかこんな豪邸に近づく奴はいない。

「はい、何でも大事なご要件であるとか。」

いかなさいますか？と聞いてくる。

最初はギルドの人かと思ったが今のランクでは人を寄こされるほど高くは無いです。

次に浮かんだのは質屋の人だ。最近行っていないからな。

でも、そんなに親しい間柄じゃないから違うし。うだうだ考えても仕方が無い。

「客間に通してやってくれ。」

「畏まりました。」

客は意外な人物だった。

「この間の美青年君だよな？」

「美青年では無い。ルカス・ビオーだ！」

そう、この前レイスを取り返そうとした美青年君もとい、ルカス君。

というか君の名前始めて聞いたんだけど。

「そうか。おっと、自己紹介がまだだったな。俺は本条竜也。竜也って呼んでくれ。」

こつちも名乗って無かったな。

「リユーヤ……か。変わった名だな。」

「よく言われる。それで、今日はどんな用だ？」

自分をぶちのめそうとした人物によくこんな態度取れると思うかも
しれないが、別に俺にとっては珍しいことではない。
鬪いは鬪い。

話は話と、区切りをつけている。

「師範からの招待状だ。」

懐から高級紙で作られた封筒を取り出す。

受け取り内容を見る。

要約すると、娘を保護してくれてありがとう。

門下生が無礼を働いて申し訳なかった。

正式な謝罪と感謝をしたいので是非屋敷に来てくれ、とのこと。

今までのことから察するにこの師範という人はレイスの父親と見て
間違いない。

しかし、腑に落ちないことがある。

それはこいつらがどういう立場にいるかということだ。

貴族に近いがそれなら師範と呼ばない。

豪商でもないだろう。

何かの武術を教えている人というのがしっくりくるが、それならこ
の高級紙を使ってくるのが不可解だ。

捕捉しておくが、この世界では一般的な紙は羊皮紙を使っている。

高級紙は一枚あるだけで金貨が必要になる。

とても手が出せる金額では無い。

それに文面の文字から見ても明らかに使い方が普通とは違う。

はつきり言つて怪しいが、レイスの父親なら悪いことは無いと思つ。

「呼ばれたからには行かなきゃな。」

「当然です。」

おい、そこでなぜ君が突つ込みを入れる！？

「それでは行きましょう。」

勝手に話を進めるな！

で。

街のはずれにある屋敷に来た。

「ここがそつなのか？」

まあ、貴族の屋敷とまではいかないがそれでも普通の家よりはでかい。

二階建てで庭には井戸がある。

離れは道場のように見える。

「師範が中でお待ちです……。」

扉を開け中に促す。

中は質実剛健。

調度品や華やかな雰囲気はほとんどなく変わりに槍や剣、盾が掛けられている。

竜也からの目から見てもそれが単なる飾りではなく実践に耐えうる

物が置かれている。

だが、最低限絨毯や高級なランプが置かれている。

「少々お待ちください。」

その部屋は応接室と言われても違和感が無い部屋だ。

フカフカのソファー。

ピカピカに磨いてある花瓶、花も綺麗な物を使っている。

シャンデリアも垂らされている。

それらを眺めながら家主が来るのを待つ。

コンコン

ガチャ

「お待たせしました。リユーヤ殿。」

ルカスと一緒に入ってきた人物。

それがこの屋敷の家主なのだろう。

その感想を一言で表わすとすれば、「大きい」だ。

素の身長も高いがそれよりも威圧感が先に来る。

冒険者が装備を外した格好をしており堀の深い顔をしている。

野性的な感じもあるが洗練された武人の気配もする。

無駄な贅肉がなく鍛え上げられた体。

おそらく格闘家。

それもかなりの使い手。

竜也は一目見ただけでおおよそ見当を付けられる。

ルカスが部屋を出ていき、お互いの自己紹介が始まる。

「始めまして、ホンジョー・リユーヤ殿。私はサクフェス流師範フ

アン・サクフェスです。」

「本条竜也と言います。以後お見知りおきを。」

お互い向き合うようにソファーに座る。

体格に似合う低い声だ。

しかし、知性や話術も達人なようだ。

ここは気お引き締めなければならぬと思い気持ちを新たにす。

「先日は娘を保護してくれたばかりか、内の者がとんだ失礼をしてしまいました。」

頭を下げて謝罪してくる。

「お気になさらないで下さい。少しばかり不幸な行き違いがあっただけですから。」

頭を上げてくださいと告げる。

放っておくといつまで下げそうだった。

「しかし、良い門下生でした。身のこなしや連携は中々。」

「ハハハ。日がな一日鍛錬に打ち込んでいますからな。リユーヤ殿も何か武術を？」

「ええ。代々伝わる古武術を少々。」

一瞬ファンさんの目が怪しく光つたのを俺は見逃さなかった。

強い者と闘いたいというのは武術をしている人間から見れば当たり前のこと。

かく言う俺もその内の一人である。

「そうですか、納得がいきました。複数の門下生を倒したのですからさぞ有名なのでしょう。」

「いえ、おそらく誰も知らないでしょう。」
知ってたら驚きだ。

「時にファン師範……。」

「なんですか？」

「そろそろ私を呼んだ本当の目的をお聞かせ下さい。」

フ、と一瞬笑った。

どうやら隠す気はないようだ。

「一つ依頼をしたいと思いましたが。」

俺がギルドに属していることはもう知っているらしい。
抜け目のない人だ。

「内容はどんなものでしょう?。」

とりあえず聞かなければ何も始まらない。

第二十四話 遅れてやって来る自己紹介（後書き）

いよいよヒロインに関係する話です。

ここでやっと。

やっとヒロインの正体が判明します。

次回レイスを取り巻く謎の関係とは！？

乞うご期待。

テレビの予告みたいになってしまいました

第二十五話 異世界の神話は事実だから笑えない（前書き）

最近、就職活動で碌に執筆出来ていません。

ですので、しばらくの間休もうかと思えます。

次に執筆するのはおそらく来年頃になると思いますが、完結はしません。

それは約束します。

第二十五話 異世界の神話は事実だから笑えない

「その前に誓ってもらいたい。この場での内容は他言無用だと。」

「何故・・・？とは愚問ですね。」

ギルドの仕事関係からでもそのような守秘義務的な物はあると聞いている。

だからこの問いには素直に応じることにした。

「分かりました。この場での内容は私が墓場まで持っていくとしましょう。」

「結構。」

そこまで話が進んだ時、コンコンとノックされる。

「失礼します。」

入ってきたのは竜也が良く見知った人物だった。

「レイス！」

まさかここで彼女が入ってくるとは思っていなかった。

彼女の手には紅茶の入ったカップが二人分。

レイスもまさか客人が竜也だとは思っていなかったのだろう。

「リニューヤ!？」

驚いて持っていた盆を落としそうになるがどうにか溢さないでティ
ーカップを出す。

まだ驚きから立ち直っていないのか、笑顔が少々ぎこちない。

「ど、どうぞ。」

それだけ言うとそそくさと退場してしまった。

「実は頼み事とは他でもない。娘のことなのです。」

予定外のことと驚いた竜也だったが本題に入ったことで気を引き締
めた。

「リユーヤ殿は我がサクフェス家の宿命をご存知ですか？」

「いや？」

「ならばご説明しましょう。かつて天地創造した際この世には様々
な神が住んでいました。」

神々はその力を使いこの世に太陽、生命、季節、海等を作りだし楽
園を作りだした。

その中にはもちろん人種も含まれていた。

だが、その楽園は長続きしなかった。

人種は無謀にも楽園を自分達の物にしようと神々に造反した。

しかし、単純に闘っても勝てないのは誰が見ても明らかだった。

そこで彼らは考えた。

神々を仲違いさせ、その隙に楽園を手に入れる。

利用された神は、慈愛と信頼の神ウィリア。

神の中では最も人間を信用していた。

ウイリアには人間が他の神々から迫害されていると嘘を吹き込む。これを信じたウイリアは他の神から事情を聴いた。だが取り合わない。

他の神々は自分の管理している範囲は基本干渉しないことを決めていた。

しかし、それを何か隠していると思った。

月日が流れても他の神への不信感はさらに募った。

そして、決定的な破綻が訪れた。

神が人間を殺したと。

事実は決定的に仲違いさせるため同じ人間が殺したとか、事故であったと言われているが本当のところは分からなかった。

その話を信じたウイリアは怒り遂に神々と闘った。

その戦いに人種も参加した。

闘いは不利な状況だったがそれでもウイリアは闘い続けた。

幾度の戦いの果てにとうとう他の神々を楽園から追い出すことが出来た。

その頃は空に暗雲がかかり、大地はおびただしい骸で覆われ、流された血で海は真っ赤に染まったという。

ウイリアは勝利宣言をしようと思ひ、人間の兵士に背を向けた瞬間背中から襲われた。

刺された剣は深々とウイリアの体を貫いた。

ここでウイリアは始めて人種に騙されたことを知った。

そのことで深い悲しみと強い憎悪抱いたウイリアは邪神となった。

邪神となつてはもう人種では止められなかった。

老若男女問わず、この世の全ての生命を殺しつくそうとした。

最早滅びしかない。

誰もがそう思いあきらめていた中、一人の賢者が立ちあがった。

彼は知の神の敬虔な信者で、幾つもの神の力を授かった。

そんな彼は邪神に堕ちたウイリアを封印すべく神の中でも禁忌と呼ばれる術で戦った。

邪神ウイリアは封印され世界は平和が訪れた。
だが。

代償は大きく賢者は死んでしまった。

しかも、その封印は完全な物ではなく。

千年後にまた邪神が復活することが分かった。

人種は自分達のしたことを悔い、賢者の子孫を絶やさずこの地を元
に戻すよう努力した。

「そして、その賢者の子孫が・・・。」

「貴方達サクフェス家だと？」

「その通りです。」

まあ、話の流れ的にそんな事だろうと思っていたが。
まさかここまでスケールの大きい話になるとは。

「先ほどの賢者の話ですが、もしまた邪神が現れて封印したら・・・。」

「はい、お察しの通り。我が一族の誰かが死にます。」

「他に、対抗手段は？」

「今のところ、確実なのはこの方法しかありません。」

「ならば、その術を誰かに譲ることは？」

「先祖はこれを悪用できないように、我々の一族にしか使えないよ
うになっておるのです。」

正直あまり良い気分ではない。
人が死ぬ。

あの事件を乗り越えたとは言え、やはり感じることもある。
とはいえ、対峙したことのない自分からは何も反論出来ない。

「しかし、賢者の子孫でありながら何故道場を？」

これは純粹な疑問だ。

「はい、初代賢者の妻が格闘をしていたので自然と受け継がれたのです。」

「そうですか。それで、依頼の内容は？」

「はい。率直に言います。」

辺りを見回して誰もいないことを確認する。
声が小さくなる。

姿勢も前かがみになり慎重かつはっきりとこう言った。

「娘の婚約者になって欲しいのです。」

「……。は？」
意味が分からない。

「実はここ最近、他国からの縁談が増えまして。表向きはかつての賢者の血筋を見内に引き入れたいと思っっている者もいるようですが。」

「

「そう言うことですか。」

なんてことは無い。

縁談を申し込んだ奴の殆どは邪神に対抗する手段を手に入れただけなのだ。

さっきの話から邪神が復活したら対抗できるのはサクフェス家だけ。断絶すれば未来は無い。

つまり、この世の人種全ての命がかかっている。

そうなればかなりの面で優遇されることは間違いないし、他国からの武力進攻は大幅に減ると言ってもいい。

要するにサクフェス家は元いた世界の核兵器に近い感じなのだろう。そう思うと己の欲の為にレイスを娶ろうとする貴族たちには嫌悪を抱く。

しかし、これで今まで不可解なことが全て符合した。

この家が平民であるが貴族と変わらない家を持っていたこと。

レイスが街を知らなかったこと。

この国が武力進攻されないこと。

旨の中の違和感が消えて幾ばくか気持ち晴れた。

「先ほどの話ですが婚約者といのは……。」

「はい、あくまで婚約だけです。」

つまり縁談をかわすための材料になって欲しいということなのだ。

第二十五話 異世界の神話は事実だから笑えない（後書き）

異世界でよくある神話系の話は物語の重要なカギを握っていたりします。

内容的にはよくあるような物ですが、神話っていう観点から見れば凄く神秘的な感じを受けますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8071/>

チートな異世界戦記

2011年6月9日21時17分発行